

基本計画書

基本計画								
事項	記入欄						備考	
計画の区分	学部設置							
フリガナ設置者	がっこうのしんたいがくせい 学校法人 大正大学							
フリガナ大学の名称	たいしょうがくせい 大正大学 (Taisho University)							
大学本部の位置	東京都豊島区西巣鴨3丁目20番1号							
大学の目的	教育基本法及び学校教育法に従い、仏教精神「智慧と慈悲の実践」により人間を総合的に理解し、人類の福祉に貢献する人材を養成すること							
新設学部等の目的	<p>【社会共生物学部】 建学の理念である「大乘仏教精神」に基づいて、「社会共生」の理念に共感を持ち、「人間が幸せに生きられる」社会の実現の為に、社会や地域が抱える諸課題を解決に導く人材を育成する。</p>							
	<p>【公共政策学科】 自由で民主的な社会におけるよりよい市民の育成に深くかかわり、人々がともに支え合う社会の実現を志向し、将来は公共にかかわる職業人として、社会や地域の問題発見、課題解決のために積極的に関与する人材を養成する。</p>							
	<p>【社会福祉学科】 社会福祉の現場でソーシャルワーカーとして活躍する傍ら、現場の諸問題を解決する能力を有する人材を養成する。</p>							
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地
	社会共生物学部 [Faculty of Psychology and Sociology]	年	人	年次人	人		年 月 第 年次	東京都豊島区西巣鴨3丁目20番1号
	公共政策学科 [Department of Public Policy]	4	130	—	520	学士（公共政策学）	令和2年年4月	
	社会福祉学科 [Department of Social Welfare]	4	65	3年次2	264	学士（社会福祉学）	令和2年年4月	
計								
同一設置者内における変更状況（定員の移行、名称の変更等）	<p>人間学部（廃止） 社会福祉学科（△80） 人間環境学科（△55） 教育人間学科（△60） （3年次編入学定員）（△3） ※令和2年4月学生募集停止 （3年次編入学定員は令和4年4月学生募集停止）人間学部</p> <p>仏教学部 仏教学科〔定員増〕 （3年次編入学定員）（8）</p> <p>心理社会学部 人間科学科〔定員減〕 （3年次編入学定員）（△1） 臨床心理学科〔定員減〕 （3年次編入学定員）（△3）</p> <p>文学部 人文学科〔定員減〕 （3年次編入学定員）（△1） 日本文学科〔定員増〕 （3年次編入学定員）（2） 歴史学科〔定員減〕 （3年次編入学定員）（△1）</p> <p>表現学部 表現文化学科〔定員減〕 （3年次編入学定員）（△3）</p> <p>地域構想研究科地域構想専攻（15）（平成31年3月認可申請）</p>							

	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数		
		講義	演習	実験・実習	計			
教育課程	社会共生学部 公共政策学科	98科目	27科目	4科目	129科目	124単位		
	社会共生学部 社会福祉学科	90科目	42科目	4科目	136科目	136単位		
教員	学部等の名称	専任教員等					助手	兼任 教員等
		教授	准教授	講師	助教	計		
新設分	社会共生学部 公共政策学科	9 (8)	4 (4)	2 (2)	0 (0)	15 (14)	0 (0)	45 (45)
	社会共生学部 社会福祉学科	6 (6)	1 (1)	1 (1)	0 (0)	8 (8)	0 (0)	67 (67)
	計	15 (14)	5 (5)	3 (3)	0 (0)	23 (22)	0 (0)	— (—)
組織の概要	既設	6 (6)	9 (9)	5 (5)	1 (1)	21 (21)	0 (0)	55 (55)
	心理学部 人間科学科	7 (7)	4 (4)	3 (3)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	11 (11)
	臨床心理学科	6 (6)	2 (2)	6 (6)	0 (0)	14 (14)	0 (0)	2 (2)
	文学部 人文学科	6 (6)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	9 (9)	0 (0)	12 (12)
	日本文学科	3 (3)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	7 (7)	0 (0)	12 (12)
	歴史学科	11 (11)	3 (3)	2 (2)	0 (0)	16 (16)	0 (0)	22 (22)
	表現学部 表現文化学科	9 (9)	3 (3)	4 (4)	1 (1)	17 (17)	0 (0)	63 (63)
	地域創生学部 地域創生学科	8 (8)	2 (2)	5 (5)	0 (0)	15 (15)	0 (0)	6 (6)
	その他	10 (7)	4 (4)	4 (4)	3 (3)	21 (18)	0 (0)	0 (0)
	分	計	66 (63)	30 (30)	33 (33)	5 (5)	134 (131)	0 (0)
要	合計	81 (77)	35 (35)	36 (36)	5 (5)	157 (153)	0 (0)	— (—)

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計						
	事 務 職 員		145 (145)	123 (123)	268 (268)						
	技 術 職 員		0 (0)	0 (0)	0 (0)						
	図 書 館 専 門 職 員		8 (8)	0 (0)	8 (8)						
	そ の 他 の 職 員		0 (0)	0 (0)	0 (0)						
	計		153 (153)	123 (123)	276 (276)						
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計						
	校 舎 敷 地	36,415.76 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	36,415.76 m <sup>2</sup>	校舎敷地のうち、 21,135.55m <sup>2</sup> は (学) 佛教教育学 園から貸与 [貸与期間] H28.4.1から 20年間					
	運 動 場 用 地	31,428.50 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	31,428.50 m <sup>2</sup>						
	小 計	67,844.26 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	67,844.26 m <sup>2</sup>						
	そ の 他	5,035.94 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	5,035.94 m <sup>2</sup>						
合 計	72,880.20 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	0 m <sup>2</sup>	72,880.20 m <sup>2</sup>							
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計						
		59,716m <sup>2</sup> ( 50,324m <sup>2</sup> )	0m <sup>2</sup> ( 0m <sup>2</sup> )	0m <sup>2</sup> ( 0m <sup>2</sup> )	59,716m <sup>2</sup> ( 50,324m <sup>2</sup> )						
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体					
	77室	51室	18室	4室 (補助職員 1人)	0室 (補助職員 0人)						
専任教員研究室		新設学部等の名称		室 数							
		社会共生学部		24 室							
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	電子ジャーナル、 視聴覚資料は 大学全体で共 用			
	公共政策学科	47,266 [5,588] (45,352 [5,496])	696 [101] (696 [101])	62 [54] (62 [54])	17,335 (17,333)	0 (0)	0 (0)				
	社会福祉学科	17,374 [1,789] (16,384 [1,699])	281 [47] (281 [47])	62 [54] (62 [54])	17335 (17,333)	0 (0)	0 (0)				
	計	64,640 [7,377] (61,736 [7,195])	977 [148] (977 [148])	62 [54] (62 [54])	17,335 (17,333)	0 (0)	0 (0)				
図書館		面積		閲覧座席数	収 納 可 能 冊 数						
		5,656m <sup>2</sup>		428	688,167						
体育館		面積		体育館以外のスポーツ施設の概要							
		1,313m <sup>2</sup>		野球場・テニスコート等				大学全体			
経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	共同研究費等は 大学全体	
		教員1人当り研究費等		400千円	400千円	400千円	400千円	-	-		
		共同研究費等		11,000千円	11,000千円	11,000千円	11,000千円	-	-		
		図書購入費	公共政策学科	5,000千円	3,000千円	3,000千円	3,000千円	3,000千円	-		-
			社会福祉学科	1,965千円	1,965千円	1,965千円	1,965千円	1,965千円	-		-
	設備購入費		-	-	-	-	-	-	-		
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次				
	1,450千円	1,250千円	1,250千円	1,250千円	- 千円	- 千円					
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金、寄付金（設立宗派・同窓会・寺院関係者）、手数料（入学検定料等）、資産運用収入 等								

大 学 の 名 称	大正大学								
	学 部 等 の 名 称	修業 年限	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	学位又 は称号	定 員 超過率	開設 年度	所 在 地
既 設 大 学 等 の 状 況	仏教学部		年	人	年次 人	人		倍	
	仏教学科	4	100	3年次 25	450	学士（仏教学）	1.08	平成22年度	
	人間学部						1.09		
	社会福祉学科	4	80	—	320	学士（社会福祉学）	1.08	平成5年度	
	人間環境学科	4	55	—	220	学士（人間環境学）	1.07	平成23年度	
	臨床心理学科	4	—	—	—	学士（臨床心理学）	—	平成21年度	平成28年より学生募集停止
	人間科学科	4	—	—	—	学士（人間科学）	—	平成12年度	平成28年より学生募集停止
	教育人間学科	4	60	3年次 3	246	学士（教育人間学）	1.12	平成23年度	
	心理社会学部						1.08		
	人間科学科	4	120	3年次 3	486	学士（人間科学）	1.08	平成28年度	
	臨床心理学科	4	110	3年次 5	450	学士（臨床心理学）	1.08	平成28年度	東京都豊島区西巣鴨 三丁目20番1号
	文学部						1.09		
	人文学科	4	65	3年次 3	276	学士（人文学）	1.04	平成22年度	平成30年度入学定員減（△5人）
	日本文学科	4	70	—	280	学士（日本文学）	1.05	平成27年度	
	歴史学科	4	160	3年次 3	646	学士（歴史学）	1.13	平成15年度	
	表現学部						1.09		
	表現文化学科	4	205	3年次 3	816	学士（表現文化）	1.09	平成22年度	平成30年度入学定員増（5人）
	地域創生学部						0.96		
	地域創生学科	4	100	—	400	学士（経済学）	0.96	平成28年度	

大学等の名称	大正大学								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
既設大学等の状況	仏教学研究科	年	人	年次人	人		倍		東京都豊島区西巣鴨3丁目20番1号
	仏教学専攻								
	博士前期課程	2	30	—	60	修士(仏教学)	0.56	平成13年度	
	博士後期課程	3	7	—	21	博士(仏教学)	0.76	平成13年度	
	人間学研究科								
	社会福祉学専攻								
	修士課程	2	5	—	10	修士(社会福祉学)	0.70	平成13年度	
	臨床心理学専攻								
	修士課程	2	18	—	36	修士(臨床心理学)	0.88	平成13年度	
	人間科学専攻								
	修士課程	2	3	—	6	修士(人間科学)	0.16	平成13年度	
	福祉・臨床心理学専攻								
	博士後期課程	3	3	—	9	博士(人間学)	0.44	平成13年度	
	文学研究科								
	宗教学専攻								
	博士前期課程	2	5	—	10	修士(文学)	0.50	昭和27年度	
	博士後期課程	3	2	—	6	博士(文学)	0.33	昭和32年度	
	史学専攻								
	博士前期課程	2	10	—	20	修士(文学)	0.70	昭和54年度	
	博士後期課程	3	2	—	6	博士(文学)	0.33	昭和54年度	
国文学専攻									
博士前期課程	2	3	—	6	修士(文学)	0.33	昭和27年度		
博士後期課程	3	2	—	6	博士(文学)	0.00	昭和32年度		
比較文化専攻									
博士前期課程	2	3	—	6	修士(文学)	0.83	平成9年度		
博士後期課程	3	2	—	6	博士(文学)	0.16	平成11年度		

附属施設の概要	<p>名称： 総合仏教研究所</p> <p>目的： 本学の設立理念である仏教精神の体現を基盤として、仏教とその文化に関する研究及び有為な研究者の育成</p> <p>所在地： 東京都豊島区西巣鴨3丁目20番1号</p> <p>設置年月： 昭和32年4月</p> <p>規模等： 259.26㎡(教室棟の一部)</p>
	<p>名称： カウンセリング研究所</p> <p>目的： 本学の設立理念である仏教精神の体現を基盤として、カウンセリングの理論・技法及びその実践に関する教育と研究を行う</p> <p>所在地： 東京都豊島区西巣鴨3丁目20番1号</p> <p>設置年月： 昭和38年4月</p> <p>規模等： 296.13㎡(教室棟の一部)</p>
	<p>名称： 地域構想研究所</p> <p>目的： 地域課題解決のための基礎研究を行い、地域創生のための新しい価値を「共創」することによって地域や社会に貢献する。</p> <p>所在地： 東京都北区滝野川6丁目2番3号</p> <p>設置年月： 平成26年10月</p> <p>規模等： 499.35㎡(研究棟の一部)</p>

(注)

1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組

- 織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
  - 3 私立の大学又は高等専門学校を取容定員に係る学則の変更の届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
  - 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行おうとする場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
  - 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
  - 6 空欄には、「－」又は「該当なし」と記入すること。

# 教 育 課 程 等 の 概 要

(社会共生学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手		
人間	人間の探究A-I (哲学する人間)	1①		2		○									兼2
	人間の探究A-II (哲学する人間)	1②		2		○									兼2
	人間の探究A-III (哲学する人間)	1④		2		○									兼2
	人間の探究B-I (学び方とリベラルアーツ)	1①		2		○									兼2
	人間の探究B-II (学び方とリベラルアーツ)	1②		2		○									兼2
	人間の探究B-III (学び方とリベラルアーツ)	1④		2		○									兼2
	人間の探究C-I (幸福についての人生論)	1①		2		○									兼2
	人間の探究C-II (幸福についての人生論)	1②		2		○									兼2
	人間の探究C-III (幸福についての人生論)	1④		2		○									兼2
	人間の探究D-I (仏教的な生き方に学ぶ)	1①		2		○									兼2
	人間の探究D-II (仏教的な生き方に学ぶ)	1②		2		○									兼2
	人間の探究D-III (仏教的な生き方に学ぶ)	1④		2		○									兼2
	人間の探究E-I (文学にみる近代)	1①		2		○									兼2
	人間の探究E-II (文学にみる近代)	1②		2		○									兼2
	人間の探究E-III (文学にみる近代)	1④		2		○									兼2
	人間の探究F-I (現代アートの人間学)	1①		2		○									兼2
	人間の探究F-II (現代アートの人間学)	1②		2		○									兼2
	人間の探究F-III (現代アートの人間学)	1④		2		○									兼2
小計 (18科目)		—	0	36	0	—			0	0	0	0	0	兼12	
第I類科目  社会	社会の探究A-I (共生社会)	1①		2		○						1			兼1
	社会の探究A-II (共生社会)	1②		2		○						1			兼1
	社会の探究A-III (共生社会)	1④		2		○						1			兼1
	社会の探究B-I (超スマート社会の光と影)	1①		2		○									兼2
	社会の探究B-II (超スマート社会の光と影)	1②		2		○									兼2
	社会の探究B-III (超スマート社会の光と影)	1④		2		○									兼2
	社会の探究C-I (近代を問い直す)	1①		2		○									兼2
	社会の探究C-II (近代を問い直す)	1②		2		○									兼2
	社会の探究C-III (近代を問い直す)	1④		2		○									兼2
	社会の探究D-I (社会の課題を解決する力)	1①		2		○									兼2
	社会の探究D-II (社会の課題を解決する力)	1②		2		○									兼2
	社会の探究D-III (社会の課題を解決する力)	1④		2		○									兼2
	社会の探究E-I (ソーシャルメディアの言語技術)	1①		2		○									兼2
	社会の探究E-II (ソーシャルメディアの言語技術)	1②		2		○									兼2
	社会の探究E-III (ソーシャルメディアの言語技術)	1④		2		○									兼2
小計 (15科目)		—	0	30	0	—			0	0	1	0	0	兼9	
自然	自然の探究A-I (地球サステナビリティ)	1①		2		○			1						兼2
	自然の探究A-II (地球サステナビリティ)	1②		2		○			1						兼2
	自然の探究A-III (地球サステナビリティ)	1④		2		○			1						兼2
	自然の探究B-I (グリーンインフラ論)	1①		2		○			1						兼1
	自然の探究B-II (グリーンインフラ論)	1②		2		○			1						兼1
	自然の探究B-III (グリーンインフラ論)	1④		2		○			1						兼1
小計 (6科目)		—	0	12	0	—			1	0	0	0	0	兼3	
学際	学融合の実践学I (解決力と決断力)	3④	2			○									兼1
	学融合の実践学II (解決力と決断力)	4①	2			○									兼1
	学融合の実践学III (解決力と決断力)	4②	2			○									兼1
	小計 (3科目)		—	6	0	0	—			0	0	0	0	0	兼1

# 教 育 課 程 等 の 概 要

(社会共生学部公共政策学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
第Ⅰ類科目	データサイエンスⅠ	1①	1				○		1	1					兼4
	データサイエンスⅡ	1②	1				○		1	1					兼4
	データサイエンスⅢ	1④	1				○		1	1					兼4
	データサイエンスⅣ	2①	1				○		1	1					兼4
	データサイエンスⅤ	2②	1				○		1	1					兼4
	データサイエンスⅥ	2④	1				○		1	1					兼4
	小計(6科目)	—	6	0	0		—		1	1	0	0	0		兼4
	コミュニケーションⅠ	3①	1				○								兼1
	コミュニケーションⅡ	3②	1				○								兼1
	コミュニケーションⅢ	3④	1				○								兼1
	小計(3科目)	—	3	0	0		—		0	0	0	0	0		兼3
	英語Ⅰ	1①		1			○								兼6
	英語Ⅱ	1②		1			○								兼6
	英語Ⅲ	1④		1			○								兼6
	中国語Ⅰ	1①		1			○								兼2
	中国語Ⅱ	1②		1			○								兼2
	中国語Ⅲ	1④		1			○								兼2
	フランス語Ⅰ	1①		1			○								兼1
	フランス語Ⅱ	1②		1			○								兼1
フランス語Ⅲ	1④		1			○								兼1	
小計(9科目)	—	0	9	0		—		0	0	0	0	0		兼9	
通学部 部門共	社会共生論	1・2①	2			○					1				
	小計(1科目)	—	2	0	0		—		0	0	1	0	0		
第Ⅱ類科目	社会学概論	2・3①	2			○			1						
	経済学概論	2・3②	2			○					1				
	社会統計学	2・3④	2			○			1	1					
	社会調査法	2・3①	2			○			1	1					
	公共政策のための政治学	2・3②		2		○									兼1
	公共政策のための法律学	2・3④		2		○				1					
	公共政策のための行政学	2・3①		2		○									兼1
	公共政策のための財政学	2・3②		2		○			1						
	公共政策のための情報学	2・3④		2		○			1						
	公共政策原論	2・3①		2		○			1						
	公共政策の基礎A(市民教育論)	2・3②		2		○			1						
	公共政策の基礎B(過程論)	2・3④		2		○			1						
	公共政策の基礎C(実践論)	2・3①		2		○			1						
	公共政策の基礎D(分析・評価論)	2・3②		2		○			1						
公共政策の基礎E(合意形成論)	2・3④		2		○									兼1	
小計(15科目)	—	8	22	0		—		5	2	1	0	0		兼2	
領域基礎部門	経済政策基礎論	2・3①		2		○			1						
	環境政策基礎論	2・3②		2		○			1						
	福祉政策基礎論	2・3④		2		○				1					
	観光政策基礎論	2・3①		2		○			1						
	教育政策基礎論	2・3②		2		○									兼1
	コミュニティ政策基礎論	2・3④		2		○									兼1
	労働政策基礎論	2・3①		2		○			1						
	文化政策基礎論	2・3②		2		○				1					
小計(8科目)			16					4	2	0	0	0		兼2	

# 教 育 課 程 等 の 概 要

(社会共生学部公共政策学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
ゼミナール部門	基礎ゼミナールⅠ	1①	2				○		3	2					
	基礎ゼミナールⅡ	1②	2				○		3	2					
	基礎ゼミナールⅢ	1④	2				○		3	2					
	課題研究ゼミナールⅠ	2①	1				○		3	1	1				
	課題研究ゼミナールⅡ	2②	1				○		3	1	1				
	課題研究ゼミナールⅢ	2④	1				○		3	1	1				
	専門ゼミナールⅠ	3①	1				○		3	1	1				
	専門ゼミナールⅡ	3②	1				○		3	1	1				
	専門ゼミナールⅢ	3④	1				○		3	1	1				
	小計 (9科目)	—	—	12	0	0	—			7	2	2	0	0	
第Ⅱ類科目 政策領域部門	ダイバーシティ・マネジメント論	2・3・4①		2		○			1						
	社会保障政策論	2・3・4②		2		○				1					
	医療政策論	2・3・4①		2		○				1					
	労働経済論	2・3・4①		2		○			1						
	地域振興論	2・3・4②		2		○					1				
	地域包括ケア論	2・3・4②		2		○					1				兼1
	地域人材育成論	2・3・4②		2		○									兼1
	多文化共生社会論	2・3・4②		2		○				1					兼1
	スポーツ振興論	2・3・4②		2		○									兼1
	スポーツ政策論	2・3・4④		2		○									兼1
	文化資源論	2・3・4①		2		○					1				
	文化とメンタルヘルス	2・3・4②		2		○				1					
	グローバルビジネス論	2・3・4④		2		○									兼1
	人間環境概論	2・3・4①		2		○			1						
	地球環境論	2・3・4②		2		○			1						
	環境社会学	2・3・4④		2		○				1					
	自然環境保全論	2・3・4①		2		○				1					
	環境教育論	2・3・4④		2		○			1						
	脱炭素社会論	2・3・4②		2		○									兼1
	環境経済学	2・3・4④		2		○									兼1
	環境法	2・3・4②		2		○									兼1
	観光資源論	2・3・4①		2		○									兼1
	観光まちづくり論	2・3・4②		2		○			1						
	観光マーケティング論	2・3・4①		2		○			1						
	観光産業論	2・3・4②		2		○			1						
	観光国際比較論	2・3・4①		2		○			1						
	スポーツツーリズム論	2・3・4②		2		○									兼1
	観光プロモーション論	2・3・4④		2		○			1						
小計 (28科目)	—	—	0	56	0	—			6	3	1	0	0	兼7	
実践部門	フィールドワークⅠ	1③	6					○	3	3					※講義
	フィールドワークⅡ	2③	6					○	4	1	1				※講義
	フィールドワークⅢ	3③	6					○	3	2	2				※講義
	海外フィールドワーク	2・3休			2			○	1						※講義
小計 (4科目)	—	—	18	0	2	—			7	3	2	0	0		
	卒業研究	4通	8					○	8	2	2				
小計 (1科目)	—	—	8	0	0	—			8	2	2	0	0	—	
合計 (126科目)		—	63	181	2	—			9	4	2	0	0	兼45	—
学位又は称号		学士 (公共政策学)			学位又は学科の分野			社会学・社会福祉学・経済学関係							

# 教 育 課 程 等 の 概 要

(社会共生学部公共政策学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	
卒 業 要 件 及 び 履 修 方 法						授 業 期 間 等								
第Ⅰ類科目36単位、第Ⅱ類88単位必修、計124単位以上修得すること。 (履修科目の登録の上限：10単位 (1クォーター))						1学年の学期区分			4学期					
						1学期の授業期間			7週					
						1時限の授業時間			100分					

# 教 育 課 程 等 の 概 要

(社会共生学部社会福祉学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験 ・ 実 習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手		
人間	人間の探究A-I (哲学する人間)	1①		2		○									兼2
	人間の探究A-II (哲学する人間)	1②		2		○									兼2
	人間の探究A-III (哲学する人間)	1④		2		○									兼2
	人間の探究B-I (学び方とリベラルアーツ)	1①		2		○									兼2
	人間の探究B-II (学び方とリベラルアーツ)	1②		2		○									兼2
	人間の探究B-III (学び方とリベラルアーツ)	1④		2		○									兼2
	人間の探究C-I (幸福についての人生論)	1①		2		○									兼2
	人間の探究C-II (幸福についての人生論)	1②		2		○									兼2
	人間の探究C-III (幸福についての人生論)	1④		2		○									兼2
	人間の探究D-I (仏教的な生き方に学ぶ)	1①		2		○									兼2
	人間の探究D-II (仏教的な生き方に学ぶ)	1②		2		○									兼2
	人間の探究D-III (仏教的な生き方に学ぶ)	1④		2		○									兼2
	人間の探究E-I (文学にみる近代)	1①		2		○									兼2
	人間の探究E-II (文学にみる近代)	1②		2		○									兼2
	人間の探究E-III (文学にみる近代)	1④		2		○									兼2
	人間の探究F-I (現代アートの人間学)	1①		2		○									兼2
	人間の探究F-II (現代アートの人間学)	1②		2		○									兼2
	人間の探究F-III (現代アートの人間学)	1④		2		○									兼2
小計 (18科目)		—	0	36	0	—			0	0	0	0	0	0	兼12
第I類科目 社会	社会の探究A-I (共生社会)	1①		2		○									兼2
	社会の探究A-II (共生社会)	1②		2		○									兼2
	社会の探究A-III (共生社会)	1④		2		○									兼2
	社会の探究B-I (超スマート社会の光と影)	1①		2		○									兼2
	社会の探究B-II (超スマート社会の光と影)	1②		2		○									兼2
	社会の探究B-III (超スマート社会の光と影)	1④		2		○									兼2
	社会の探究C-I (近代を問い直す)	1①		2		○									兼2
	社会の探究C-II (近代を問い直す)	1②		2		○									兼2
	社会の探究C-III (近代を問い直す)	1④		2		○									兼2
	社会の探究D-I (社会の課題を解決する力)	1①		2		○									兼2
	社会の探究D-II (社会の課題を解決する力)	1②		2		○									兼2
	社会の探究D-III (社会の課題を解決する力)	1④		2		○									兼2
	社会の探究E-I (ソーシャルメディアの言語技術)	1①		2		○									兼2
	社会の探究E-II (ソーシャルメディアの言語技術)	1②		2		○									兼2
	社会の探究E-III (ソーシャルメディアの言語技術)	1④		2		○									兼2
小計 (15科目)		—	0	30	0	—			0	0	0	0	0	0	兼10
自然	自然の探究A-I (地球サステナビリティ)	1①		2		○									兼2
	自然の探究A-II (地球サステナビリティ)	1②		2		○									兼2
	自然の探究A-III (地球サステナビリティ)	1④		2		○									兼2
	自然の探究B-I (グリーンインフラ論)	1①		2		○									兼1
	自然の探究B-II (グリーンインフラ論)	1②		2		○									兼1
	自然の探究B-III (グリーンインフラ論)	1④		2		○									兼1
小計 (6科目)		—	0	12	0	—			0	0	0	0	0	0	兼3
学際	学融合の実践学I (解決力と決断力)	3④	2			○									兼1
	学融合の実践学II (解決力と決断力)	4①	2			○									兼1
	学融合の実践学III (解決力と決断力)	4②	2			○									兼1
	小計 (3科目)		—	6	0	0	—			0	0	0	0	0	0
キー ・ ポ ・	データサイエンス I	1①	1					○							兼6
	データサイエンス II	1②	1					○							兼6

# 教 育 課 程 等 の 概 要

(社会共生物学部社会福祉学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
ヒ ミ ナ ー ル コ ン ピ ュ ー テ ン シ ー	データサイエンスⅢ	1④	1				○								兼6
	データサイエンスⅣ	2①	1				○								兼6
	データサイエンスⅤ	2②	1				○								兼6
	データサイエンスⅥ	2④	1				○								兼6
	小計 (6科目)	—	6	0	0	—			0	0	0	0	0	0	兼6





# 教 育 課 程 等 の 概 要

(社会共生学部社会福祉学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手			
専門 部門	精神保健福祉論Ⅰ	2①～②		2		○			1							
	精神保健福祉論Ⅱ	2③～④		2		○										兼1
	精神保健福祉論Ⅲ	3①～②		2		○										兼1
	精神保健福祉援助技術総論	3①～②		2		○										兼1
	精神保健福祉援助技術各論	3④		2		○										兼1
	精神科リハビリテーション学	3①～②		4		○										兼1
	精神保健学	2③～④		4		○										兼1
	精神疾患とその治療	2③～④		4		○										兼1
	医学概論	2③～④		2		○										兼1
	医療福祉論	3①～②		2		○			1							
	医療ソーシャルワーク論	3①～②		2		○			1							
	エンド・オブ・ライフケア論	2①～②		2		○										兼1
	社会福祉特講Ⅰ	2通		2		○					1					
	社会福祉特講Ⅱ	3通		2		○					1					
	社会福祉特講Ⅲ	4通		2		○					1					
	小計 (44科目)	—	—	0	94	0	—	—	—	6	1	1	0	0		兼19
第Ⅱ類 科目  実習・ 演習部門	ソーシャルワーク演習Ⅰ	2①～②		2			○		1							兼4
	ソーシャルワーク演習Ⅱ	2③～④		2			○		1							兼4
	ソーシャルワーク演習Ⅲ	3①～②		2			○		1							兼4
	ソーシャルワーク演習Ⅳ	3③～④		2			○		1							兼3
	ソーシャルワーク演習Ⅴ	4①～②		2			○			1						兼3
	ソーシャルワーク演習Ⅵ	4①～②		2			○		2							兼1
	ソーシャルワーク実習指導Ⅰ	2③～④		2			○		3	1						兼1
	ソーシャルワーク実習指導Ⅱ	3通		4			○		3	1						兼1
	ソーシャルワーク実習Ⅰ	3③		4				○	3	1						兼1
	ソーシャルワーク実習Ⅱ	4休		2				○	2							兼1
	精神保健福祉援助演習Ⅰ	4①～②		2			○		1							
	精神保健福祉援助演習Ⅱ	4③～④		2			○		1							
	精神保健福祉援助実習指導Ⅰ	3④		2			○		1							
	精神保健福祉援助実習指導Ⅱ	4①～②		2			○		1							
	精神保健福祉援助実習指導Ⅲ	4③～④		2			○		1							
	精神保健福祉援助実習Ⅰ	4休		2				○	1							
精神保健福祉援助実習Ⅱ	4休		3				○	1								
小計 (17科目)	—	—	0	39	0	—	—	—	5	1	0	0	0		兼9	
応用 部門	プロジェクト研究Ⅰ	3①～②		2			○		6	1						
	プロジェクト研究Ⅱ	3④		2			○		6	1						
	プロジェクト研究Ⅲ	4①～②		2			○		6	1						
	プロジェクト研究Ⅳ	4③		2			○		6	1						
	インターンシップⅠ	2通		2			○		2							
	インターンシップⅡ	3通		2			○		2							
小計 (6科目)	—	—	0	12	0	—	—	—	6	1	0	0	0		0	
	卒業研究	4通		8			○		6	1						
	卒業論文	4通		8			○		6	1						
	小計 (2科目)	—	—	0	16	0	—	—	6	1	0	0	0		0	
合計 (134科目)		—	—	29	248	0	—	—	6	1	1	0	0		兼67	
学位又は称号	学士 (社会福祉学)		学位又は学科の分野				社会学・社会福祉学関係									

# 教 育 課 程 等 の 概 要

(社会共生学部社会福祉学科)

科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手	
卒 業 要 件 及 び 履 修 方 法						授 業 期 間 等								
第Ⅰ類科目26単位以上、第Ⅱ類110単位以上必修、計136単位以上修得すること。 (履修科目の登録の上限：12単位 (1クォーター))						1学年の学期区分			4学期					
						1学期の授業期間			7週					
						1時限の授業時間			100分					

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生物学部公共政策学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第 I 類 科目 人間	人間の探究 A-I (哲学する人間)	3クォーター（6単位：100分授業、週2回）にわたって「哲学する人間」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。日常生活において、心は何かをいつも感じている。喜怒哀楽に限らず、ちょっとしたことにでも感性は働くものである。この「感じる」とは何かという問題を通して哲学的思考をめぐらせ、広い視野で「感じる」ということを理解できるようにする。また、哲学的な思考法の基礎を学ぶ。	
	人間の探究 A-II (哲学する人間)	「人間の探究 A-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。「哲学する人間」をテーマとした応用科目として開講し、「人間の探究 A-I」で修得した哲学的な思考法により、生きることと考えることについて、「よく生きる」「よく考える」というのは、どういうことなのかを考えてみる。また、このことについて大学生活や自身の未来設計にどのように繋がっていくのか自分なりの答えを見つけ、論理的に述べる技能を修得する。	
	人間の探究 A-III (哲学する人間)	「人間の探究 A-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「哲学する人間」をテーマとした発展科目として開講し、「人間の探究 A-I」で修得した基礎知識、「人間の探究 A-II」で修得した応用技能を統合し、哲学の観点から知識（身につけるもの）・知恵（出すもの）の収集、統合、取捨選択を行う方法を身につける。また、大学での学びや社会で働くうえで生かすことができるかについて、自身の考えや決意を周囲と共有し、他者に理解してもらおうための姿勢を身につけることを目標とする。	
	人間の探究 B-I (学び方とリベラルアーツ)	3クォーター（6単位：100分授業、週2回）にわたって「学びのイノベーション」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。日本国内および諸外国における学びのイノベーション事例を概観し、イノベーションが必要となっている社会的背景である経済活動や文化活動のグローバル化、テクノロジーの発展などによる職業の世界の変化、医療革命による人生の長期化（いわゆる人生100年時代の到来）などの現状や未来にたいして行われているさまざまな予測を知る。加えて、学びのイノベーションを支えるテクノロジーや教育理論・哲学について学ぶ。	
	人間の探究 B-II (学び方とリベラルアーツ)	「人間の探究 B-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。「人間の探究 B-I」の基盤に立ち、引続き学びのイノベーションにたいする理解を深めていく。イノベーションの実践者をゲストスピーカーとして招きながら、机上の空論ではない、地に足のついたリアルな学びの実践方法を知り、学びの世界が実際に変容していることを理解する。その上で、これからの学び方とそのイノベーションについて、自分なりの考えを深め、整理する。	
	人間の探究 B-III (学び方とリベラルアーツ)	「人間の探究 B-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。人間の探究 B-I・IIの基盤に立ち、さまざまな学びの手法・ツール・理論・哲学を体系的に整理した上で、自らの学びをいかにイノベーションすべきか考える。大学卒業後の世界に向け、自身の大学での学び方をイノベーションする方法を構想し、日々の学修に落とし込むことを目的とする。到来しつつある人生100年時代やAI社会を、自らの学びをイノベーションし、他者とともに喜びを持って生きていける人材となることを目指す。	
	人間の探究 C-I (幸福についての人生論)	3クォーター（6単位：100分授業、週2回）にわたって「幸福についての人間学」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。誰もが日常生活において、「幸せとはなにか」、「生きるとはなにか」、「人生とはなにか」について考える瞬間があるであろう。自身が幸せだと感じる瞬間、生きていると感じる瞬間について議論・討論を行い、自分の価値観を見つめなおし、自身についての理解を深める。	

授 業 科 目 の 概 要

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	人間の探究C-II (幸福についての人生論)	「人間の探究C-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「幸福についての人間学」をテーマとした応用科目として開講し、「人間の探究C-I」で見つめた自身の価値観について、さらに深く考えてみる。また、今までの人生を振り返り、人との出会いやターニングポイントとなった出来事を見つける。これらが大学生活や自身の未来設計にどのように繋がっていくのか、論理的に述べる技能を修得する。	
	人間の探究C-III (幸福についての人生論)	「人間の探究C-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「幸福についての人間学」をテーマとした発展科目として開講し、「人間の探究C-I」で修得した基礎知識、「人間の探究C-II」で修得した応用技能を統合し、自分にとっての「幸福」とは何かを探究し、今後の大学での学びや社会で働く意味を考える。また、自身の考えや決意を周囲と共有し、他者に理解してもらうための姿勢を身につけることを目標とする。	
	人間の探究D-I (仏教的な生き方に学ぶ)	3クォーター(6単位:100分授業、週2回)にわたって「智慧と慈悲の実践」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。日本に深く根付いている「仏教」について基礎的な知識を身につけ、「仏教」に関して基本的な知識と作法を修得することを目標とする。日本人にとって身近な宗教である「仏教」について、その成立から展開まで歴史的・思想的な概要を学ぶ。講義を通じて、日本の文化、芸術、言葉など、私たちの日常生活に溶け込んでいる「仏教」を改めて発見するほか、参加することが多いであろう仏教行事の意味を知り、初歩的な作法を身につける。	
	人間の探究D-II (仏教的な生き方に学ぶ)	「人間の探究D-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「智慧と慈悲の実践」をテーマとした応用科目として開講し、「人間の探究D-I」で修得した仏教思想に関する基礎知識をもとに、私たちの思考形成、行動に仏教がどのような影響を与えているのかを思考することを目標とする。仏教に限らず、宗教の根源はこの世に命を授かった自分が人間としてどのように生きるのかを考える点にある。この講義では、仏教思想の視点から人間の生き方にアプローチし、自身の人生における未来設計へとつなげる技能を修得する。	
	人間の探究D-III (仏教的な生き方に学ぶ)	「人間の探究D-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「智慧と慈悲の実践」をテーマとした発展科目として開講し、仏教思想に基づいて、自身が生きる意味、学ぶ意味、働く意味について自ら思考し、具体的な行動に移せることができるようになることを目標とする。「人間の探究D-I」で修得した基礎知識、「人間の探究D-II」で修得した応用技能を統合し、自身が描く大学生活での学びや、社会において働くことの意味を見出ししていく。また、自身の考えや決意を周囲と共有し、他者に理解してもらうための姿勢を身につける。	
	人間の探究E-I (文学にみる近代)	3クォーター(6単位:100分授業、週2回)にわたって「近代文学に表現された人間の諸相」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。まず近代文学成立の要件や「言文一致」「近代的自我」など近代文学の黎明期を彩る必須のキーワードを基礎知識として学ぶとともに、主に明治期の文学を鑑み、その「問い」の範型を知る。またそこに表現された「個人」の姿や「欲望」の変遷を理解しながら、主人公たちが「他者」や「社会」の現実との狭間でどのような困難に向き合ってきたかを体系的に整理できる能力を身につける。	

第 I 類 科 目

人 間

**授 業 科 目 の 概 要**

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第 I 類 科目  社会	人間の探究 E-II (文学にみる近代)	「人間の探究 E-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数による PBL 教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「近代文学に表現された人間の諸相」をテーマとした応用科目として開講し、主に大正期・昭和前期の文学作品を対象として、まずは「人間の探究 E-I」で培ったアプローチ方法で作品分析を行う。大正教養主義やマルクス主義の影響、また女性たちの地位向上などによって「問い」のあり方や発信者の主体がどのように変わってきたかを知識・教養として身につけるとともに、近代の本質とその課題を真正面から受けとめてきた文学表現の特徴と「人間学」の内実を言語化する技能を修得する。	
	人間の探究 E-III (文学にみる近代)	「人間の探究 E-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数による PBL 教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「近代文学に表現された人間の諸相」をテーマとした展開科目として開講し、主に戦後文学や昭和後期、さらには平成期の文学作品を対象として、まずは「人間の探究 E-I・II」同様の授業工程を経る。敗戦と復興、また高度資本主義時代の到来の中で変化していく文学表現とそこに表現された「内面」の変化を知識・教養として身につける。またこの間に触れた作品を通じて得た「問い」の数-を現代的なコンテキスト及び自らの課題として置換し、その探究のための絶好の参照資料として活用することで、他者とともに深い考察ができることを目標とする。	
	人間の探究 F-I (現代アートの人間学)	クォーター (6 単位：100 分授業、週 2 回) にわたって「現代アートの人間学」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングを実施する。映画や映像作品を通して美術史を学びながら、スタジオセットやロケーション美術、衣装、メイクなどの映像表現を理解する。講義を通じて「アートとは何か」を自分の言葉で説明することができ、グループ議論により他者の意見やアート感覚の違いを認め合うことで、自分の意見を深化させる。映像美術の魅力を的確に自分の言葉でプレゼンテーションできることを目標とする。	
	人間の探究 F-II (現代アートの人間学)	「人間の探究 F-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数による PBL 教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングを実施する。「現代アートの人間学」をテーマとした応用科目として開講し、映画や映像作品の演技を軸に映像表現を捉え、「演技とは何か」を理解する。「人間の探究 F-I」で修得した美術的な視点と共に、芸術作品を構成する要素の基礎知識を修得することで、その背景を理解する。そのうえで芸術作品の表面的な表現だけでなく、その中にある人間性について考察・議論を行い、アートの社会的意義や課題を説明できることを目標とする。	
	人間の探究 F-III (現代アートの人間学)	「人間の探究 F-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数による PBL 教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「現代アートの人間学」をテーマとした展開科目として開講する。「人間の探究 F-I・II」で修得した知識や議論をもとに、現代におけるメディア、デザイン、プロダクトといった様々なアートの持つ力やその存在意義を理解し、人や社会との結びつきを考察する。アートを通して表現される「文化とは何か」「社会とは何か」「人間とは何か」について討議し、他者とともに深い考察ができるようになることが目標である。	
	社会の探究 A-I (共生社会)	3 クォーター (6 単位：100 分授業、週 2 回) にわたって「共生社会」(支え合う社会の実現)というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。ダイバーシティ (多様性) に関する基本的な概念と、日本における現状、課題について理解することを目標とする。人々の生活や人間関係にさまざまな変化が生まれている中で、多様な人々がともに豊かな生活を営み共生していくことの必要性について、諸外国の事例も交え、基本的な知識を修得する。	

**授 業 科 目 の 概 要**

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会の探究A-II (共生社会)	「社会の探究A-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「社会共生」(支え合う社会の実現)をテーマとした応用科目として開講し「社会の探究A-I」で修得したダイバーシティに関する基礎知識をもとに、さまざまな人間が集う大学において、他者との議論や討論の場をつくり、多様な意見に触れる機会を提供し、自分と異なる境遇や価値観を持つ他者への理解を深め、共生していくためにどのように行動すべきかを思考することを目標とする。	
	社会の探究A-III (共生社会)	「社会の探究A-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「社会共生」(支え合う社会の実現)をテーマとした発展科目として開講し、ダイバーシティ社会の中で、多様な人間の共生を実現するために自身の人生観やキャリアデザインと結び付けて具体的な行動に移せるようになることを目標とする。また、プレゼンテーション等を通じて自身の考えや決意を周囲と共有し、他者に理解してもらうための姿勢を身につけることを目標とする。	
	社会の探究B-I (超スマート社会の光と影)	3クォーター(6単位:100分授業、週2回)にわたって「超スマート社会の光と影」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「超スマート社会の光と影」をテーマとした基礎科目として開講する。第4次産業革命と言われるAIが社会に与える影響について、その技術や進化の歴史を軸に、医療、教育、法律、経営などの観点から学ぶ。講義を通じて、AIの基本的な事項を理解し、様々な観点から社会との関係について議論し、AIが与える社会的影響を考察し理解することを目標とする。	
	社会の探究B-II (超スマート社会の光と影)	「社会の探究B-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「超スマート社会の光と影」をテーマとした応用科目として開講し、「社会の探究B-I」で修得したAIに関する基礎知識をもとに、超スマート社会における人間の役割とは何か、AIなどの技術と人間が共存・融合した社会を創るためにはどのようにすれば良いかを考察する。この講義では、既に実用化されている具体的な事例を示し、その機能や役割を理解する。持続可能な社会を実現するために技術をどのように活用することができるのか、するべきかについて考察・議論を行い、その社会的意義や課題を説明できることを目標とする。	
	社会の探究B-III (超スマート社会の光と影)	「社会の探究B-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニング形式で実施する。「超スマート社会の光と影」をテーマとした展開科目として開講し、「社会の探究B-I・II」で修得した知識や議論をもとに、超スマート社会時代における人間の存在価値について、学ぶ意味、働く意味、社会のあり方を考察し、グループにて討議する。最終的に「AIは社会をどのように変えるのか」「超スマート社会時代の人間らしさとは」などのテーマで発表を行う。様々な意見や考え方を共有し、より良い社会とするための提案ができることを目標とする。	
	社会の探究C-I (近代を問い直す)	3クォーター(6単位:100分授業、週2回)にわたって「近代を問い直す」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。近代日本の出発点である幕末・明治維新から日清戦争、日露戦争、アジア・太平洋戦争に至るまでの政治・経済・外交・文化について、基礎的な事件・人物などを取り上げながら近代日本の歴史について学び、今日の日本がどのように構築されていったのか理解を深めていく。	

授 業 科 目 の 概 要

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第 I 類 科目  社会	社会の探究 C-II (近代を問い直す)	「社会の探究 C-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数による PBL 教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「近代を問い直す」をテーマとした応用科目として開講し、「社会の探究 C-I」で修得した日本の歴史に関する基礎知識をもとに、現代から見て近代とはどのような時代だったのか、現代にどのような影響を与えたのかを理解する。また、生き方を参考にしたい人物を一人取り上げ、プレゼンテーションを行い、自身の未来設計へつなげることを目標とする。	
	社会の探究 C-III (近代を問い直す)	「社会の探究 C-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数による PBL 教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「近代を問い直す」をテーマとした発展科目として開講し、「社会の探究 C-I」で修得した基礎知識、「社会の探究 C-II」で修得した応用技能を統合し、近代史から学ぶこと、近代で起きた出来事の中から、大学での学びや社会で働くうえで生かすことができる事柄があるか考え、論理的に述べる。また、自身の考えや決意を周囲と共有し、他者に理解してもらうための姿勢を身につけることを目標とする。	
	社会の探究 D-I (社会の課題を解決する力)	3 クォーター (6 単位: 100 分授業、週 2 回) にわたって「社会の課題を解決する力」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。社会課題解決においては、解決すべき課題の特定や定義がきわめて重要である。しかしながら、社会課題は、さまざまな近接領域の問題や、関係する人や組織、あるいは歴史・文化・文脈・利害などが複雑に絡まった結果として表出している場合が多く、その全体像や各要素の関係性をていねいに分析・理解することから解決に向けた取り組みをはじめめる必要がある。日本国内および諸外国における社会課題解決の取り組みをケーススタディとして取り上げながら、社会課題を考察・理解する方法を修得する。	
	社会の探究 D-II (社会の課題を解決する力)	「社会の探究 D-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数による PBL 教育を併用して実施する。「社会の探究 D-I」の内容を踏まえ、決断する力にたいする理解を深めることを目的に講義を行う。社会課題解決の取り組みは、日々「決断」の連続である。決断なくして社会課題は解決しない。その一方で、決断するために必要なすべての情報が揃うケースは稀である。多くの決断は不完全な情報をもとに行われる。そのような状況下で人はいかにすればより賢明な決断を下せるのか。理論と実例を交えながら考察する。	
	社会の探究 D-III (社会の課題を解決する力)	「社会の探究 D-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数による PBL 教育を併用して実施する。この授業では、現代または未来において特に解決すべき重要な社会課題を紹介する。受講生には、「社会の探究 D-I・II」の内容を踏まえ、紹介された社会課題の構造を分析し、解決に自身がいかに関与できるか考え、グループ発表してもらう。講義形式の授業だが、グループワークを取り入れるため、授業時間外にグループ活動への参加が求められる。他者と協働しながら社会の課題を解決するための知識・スキルを身につけ、活用する力を養うことを目標とする。	
	社会の探究 E-I (ソーシャルメディアの言語技術)	3 クォーター (6 単位: 100 分授業、週 2 回) にわたって「ソーシャルメディアの言語技術」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。ソーシャルメディアによる情報環境の変化は、社会に大きな変化や影響をもたらしている。ソーシャルメディアに関連する歴史、技術、法の基礎を学び、ソーシャルメディアの基本的な仕組みを理解し、ソーシャルメディアを活用するための基礎的なメディア・リテラシーを修得することを目標とする。	
社会	社会の探究 E-II (ソーシャルメディアの言語技術)	「社会の探究 E-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数による PBL 教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「ソーシャルメディアの言語技術」をテーマとした応用科目として開講し、ソーシャルメディアの登場により個人の発言が容易になり、新たな社会的繋がりが生み出された。一方で、それゆえの社会的課題も多い。その二面性を理解したうえで、ソーシャルメディアを活用し、人や社会との繋がりをより良いものとするためのメディア・リテラシーである文章表現、言語技術について学ぶ。具体的な事例研究を通じてグループ討議を行い、あるべきソーシャルメディアの言語技術を修得し、適切な情報発信ができることを目標とする。	

## 授 業 科 目 の 概 要

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第 I 類 科 目	社会の探究E-III (ソーシャルメディアの言語技術)	「社会の探究D-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニング形式で実施する。「ソーシャルメディアの言語技術」をテーマとした展開科目として開講し、「社会の探究E-I・II」で修得した知識や議論をもとに、情報化社会におけるソーシャルメディアのあり方を考察し、グループにて討議する。その議論を通じて様々な意見や考え方を共有し、人と人、人とモノ、人と社会のあらたな繋がりを築くプラットフォームとしてのソーシャルメディアを探究する。	
	自然の探究A-I (地球サステナビリティ)	3クォーター(6単位:100分授業、週2回)にわたって「地球サステナビリティ」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「地球の歴史とナチュラルヒストリー」をサブテーマに、環境問題など、現在の人類社会が直面する課題について大局的な捉え方ができるようになるための基礎知識を修得することを目標とする。われわれの暮らす地球は45億年以上という歴史の中で様々な変容を経験してきた。また、そこに三十数億年前に誕生した生命は、原始の姿から現在では地球上に数千万から1億種以上といわれるほどに多様な進化を遂げた。本講義では、こうした地球史的なタイムスケールのもとで、われわれの住む地球のたどってきた歴史やそこに育まれてきたナチュラルヒストリー(自然史・自然誌)について理解を深める。	
	自然の探究A-II (地球サステナビリティ)	「自然の探究A-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「地球サステナビリティ」をテーマとした応用科目として開講し、「人類と自然」をサブテーマに、世界各国で現在も営まれている人間と自然の多様な文化を学び、地球規模の視野でサステナビリティについて考えることができるようになるための基礎知識を学ぶことを目標とする。現在の人類の祖先がアフリカで10万年以上前に誕生して以来、人類は世界中にその活動範囲を広げてきた。その中で、火の利用、農業の開始、化石燃料の利用による産業革命、そして現在経験している情報革命など技術の革新によって自らの社会を変えたとともに、周囲の自然環境を大きく変え、その中でいくつもの文明が栄え、また滅びてきた。本講義では、こうした人類史的なスケールから、人と自然のかかわりの歴史について学ぶ。	
	自然の探究A-III (地球サステナビリティ)	「自然の探究A-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「地球サステナビリティ」をテーマとした発展科目として開講し、「人間と水・食料・エネルギー」をサブテーマに、サステナビリティに関する複合的な視点を養うことを目標とする。地球上の人口が80億を超え、2050年には100億近くになると予想される中、サステナビリティの鍵を握るのは、水・食料・エネルギー(Water Food Energy Nexus)と言われる。これらの要素はお互いに密接に関連しあっており、いかにこれらの三要素をバランスさせながら同時に問題解決を図っていくかが地球の持続可能性を目指す上で不可欠となっている。本講義では、こうした観点から、水、食料、エネルギーをめぐる地球的な規模の問題について学ぶ。	
	自然の探究B-I (グリーンインフラ論)	3クォーター(6単位:100分授業、週2回)にわたって「グリーンインフラ論」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングを実施する。食糧供給や気候調整、災害リスク緩和など、生態系サービスと言う言葉で総称されるように、自然は人間にとって様々な有益な便益をもたらす。こうした自然の働きをインフラの一部としてコンクリートなどによる他のインフラと組み合わせて活用していこうという「グリーンインフラ」という考え方が近年国内外で広く受け入れられるようになってきた。また、類似の概念を含めて「自然を基盤とした解決策(Nature-Based Solutions)」という概念や取り組みが急速に広まっている。本講義では、グリーンインフラやそれに関連する分野の概要について学ぶとともに、特に都市や河川、海岸におけるグリーンインフラについて事例を基にして学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
第Ⅰ類科目	自然			
		自然の探究B-II (グリーンインフラ論)	「自然の探究B-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニング形式で実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングを実施する。「グリーンインフラ論」をテーマとした応用科目として開講し、講義形式。自然の探究B-Iを踏まえ、「グリーンインフラ」を含めた「自然を基盤とした解決策」についてさらに理解を深める為に、本講義では特にグリーンインフラの中でも農村地域や山村地域、保護地域等におけるグリーンインフラについて事例を基にして学ぶ。さらに、防災・減災や気候変動適応に関して、Eco-DRR (生態系を基盤とした防災・減災)やEbA (生態系を基盤とした適応)などの考え方や事例についても学ぶ。	
		自然の探究B-III (グリーンインフラ論)	「自然の探究B-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「グリーンインフラ論」をテーマとした展開科目として開講し、「自然の探究B-I・II」で修得した知識や議論をもとにグリーンインフラに関連する最新の科学的研究の成果や政策の動向について学ぶ。さらに、グリーンインフラを実装していくために必要な制度論、計画論について演習を通して学ぶ。	
	学際	学融合の実践学Ⅰ (解決力と決断力)	講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。3年次3クォーターまでに学んだ第Ⅰ類科目(教養科目)と第Ⅱ類科目(専門科目)を横断する学際的な科目として開講する。卒業研究は専門分野の学びの総括であるが、専門ではない学修の幅を広げるために、時代の変化に応じた学横断的なテーマを各自が設定した上で、チューターやメンターの支援を受けながら課題解決に取り組む。社会に出てからも大学での学びを活かし、生涯学び続けることを目的に、これまで学んだ手法を駆使し、様々な課題に対する解決方法を実践する。「学融合の実践学Ⅰ」では「解決力と決断力」というテーマを設定し、課題解決に向けた実践計画を策定する。	
		学融合の実践学Ⅱ (解決力と決断力)	講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「学融合の実践学Ⅰ」で設定したテーマや手法に従って実践する。各自の実践の中間報告をケーススタディとしてグループで共有し、あわせてチューターやメンターの指導やサポートを受け、修正や改善を行う。専門分野が異なる学生とのコミュニケーションによりアイデアの創発が生まれ、お互いにブラッシュアップしながら協働し、学問的にも人間的にも成長することを学ぶ。	
		学融合の実践学Ⅲ (解決力と決断力)	講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「学融合の実践学Ⅱ」での実践を継続するとともに、最終的な課題可決報告を行う。課題解決への取り組みを通じて、分野を超えた知の終結が必要なこと、他者と協働することの重要性を学び、自身が生涯学び続けるための学びのプラットフォームを確立することを目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第 I 類科目  キ ー ・ コ ン ピ テ ン シ ー ゼ ミ ナ ー ル	データサイエンス I	演習方式で行う。データサイエンスに関わる基礎的な知識を得ることを目標とする。データとはなにか、データが注目される背景、データの所在・発生源、データ取得、データの活用領域といったデータに関する基礎知識をベースに、データサイエンスとは何か、地方、日本、世界におけるデータサイエンスの現状、データサイエンスが社会に及ぼす影響等について幅広く学び、どのような手段、手法、しくみを通じて有効に活用できていくか、その活用の可能性について理解を深める。あわせてこれらのデータが形成される過程の調査法についての知識も学修する。	
	データサイエンス II	演習方式で行う。データサイエンスの重要性とそのために必要な知識、人材について理解を深めることを目標とする。IT技術の進歩により、取り扱えるデータの種類が増え、膨大なデータ(ビッグデータ)の管理および迅速な処理が可能になり、その活用は急速に広がっている。一方、増大するデータをどのように活用するかが大きな課題ですが、様々な視点からの様々なデータは、社会に大きな変化をもたらす力を持っていることは明らかである。ビッグデータを的確に活用することで課題の発見・解決や新たな価値創出が可能となる。私たちの社会に存在するデータが、公的機関、企業、団体等によってどのように活用されているのかといった実例が、社会にどのような変革をもたらしたのか、といった事例を学ぶ。	
	データサイエンス III	演習方式で行う。公的機関や企業・団体のデータを活用し、データ分析に必要な数理・統計について理解を深めることを目標とする。データの整理(平均値、中央値、最頻値等)、データの状況(分散・標準偏差)、データ分布(四分位・パーセンタイル等)、データの関係性(相関)、データ間の関係(回帰分析)、統計数値の精度(標本分布、信頼区間)等について、実データの統計処理しながら、その値が表す意味と活用の視点について理解を深める。あわせて公表されている統計データを活用し、その統計が意味する課題や特徴の整理をおこなう能力を、演習を加えながら身につける。	
	データサイエンス IV	演習方式で行う。基本的な統計と活用を理解した上で、実際のデータからの分析に必要な微積分、線形代数、集合・位相、確率論などへの理解を、演習を加えながら深め、データ分析技能の修得に結びつけることを目標とする。実際の統計表をみながら、統計処理によって導かれた値を使い、比率の活用、比率による分析、時系列データ、時系列データの調整、時系列データの予測などについて学び、統計分析手法(相関、回帰、分類、統計的推測等)等による検証をおこなう。	
	データサイエンス V	演習方式で行う。公的統計(E-StAt, REsAsほか)や、データ分析ソフト(SASほか)、機械学修で活用される言語(R, Pythonほか)などを活用する方法を修得することを目標とする。統計学の改正手法(データ分析・データマイニング)や、テキストデータのように数値化(定量化)されていないデータを加工する手法(テキストマイニング)、機械学修(人工知能)の活用など、公的機関や企業・団体等がデータの活用の際に実践している実践的なアプローチ例を知り、ケーススタディを通じて、仮説から導く検証、データの解析結果から導く仮説・解決策を、演習を通じて身につけていく。	
	データサイエンス VI	演習方式で行う。ビッグデータや個別のデータを活用したデータサイエンスによる分析(データサイエンス I~Vでの学修内容)を通じて、問題・課題の発見、解決方法を理解することを目標とする。実際の事例に基づくケーススタディをおこなった上で、ビッグデータを活用し社会的な課題、ビジネス的な課題、地域間の課題などのデータ分析、およびフィールドワークやインターンシップ等をおこなう地域(自治体、公的団体等)・企業等のデータを活用したデータマイニングを通じて、課題の発見と解決策の構築について、演習を通じて学び、提言につながる学修をおこなう。	
	コミュニケーション I	演習方式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。コミュニケーションについての定義及び実践について理解することを目標とする。特にコミュニケーションが成立したという状態はどのような状態になっているのか、ということについて、知覚・感情・思考の伝達という視点から学ぶ。次にコミュニケーションの基礎である言語技術の修練法について述べる。また、その実践として、会話の前段階である文章技術を鍛えるためのトレーニングをチューターのサポートを得て実践する。	

**授 業 科 目 の 概 要**

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	コミュニケーションⅡ	<p>演習方式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「コミュニケーションⅠ」で学んだコミュニケーション理論(概況)の理解を深めることを目標とする。言語技術(言語を使って他者に語りかける)という視点から、次の各項目についてトレーニングをおこなう。</p> <p>①日常生活の挨拶、会話(電話を含む)について、マナーを含めてトレーニングする。</p> <p>②スピーチ、討論、ディベート、ファシリテートなどの実践を教室やラーニングコモンズを利用して実践する。</p> <p>③メール、SNS、手紙の文章技術など様々な分野について構築し、演習形式で実習(トレーニング)を行う。</p>	
	コミュニケーションⅢ	<p>演習方式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。自ら考えていることを相手に正確に伝え、相手を説得(交渉)できるようになることを目標とする。そのためには言語技術の向上が必須事項であることから、「コミュニケーションⅡ」に引き続いてスピーチの前に徹底的に読む、書く必要性を認識し、習慣化を実践する。そのため多くのチューターを配置して授業運営をサポートする。本講義の目標とするところは、コミュニケーション技術を高めて「生きる力」を付けていくことにあり、その成果はこれからの科目履修にどのように応用するのか、自由な意見をこれまでに学んだコミュニケーション技法によって表現することで、自身の成長を測る。</p>	
	英語Ⅰ	<p>演習方式で行う。現代社会がかかえる諸問題について、メディア空間にあふれる情報を取捨選択し、さまざまな議論を整理した上で、論理的に考えみずからの意志を構築する能力を身につける。大学進学後の高等教育第一段階の英語科目として、本講座は、次の3つの能力の獲得を目的とする。(1)新聞、インターネット、データベース、重要文献といった各種のデータソースのありかを知り、信頼できる情報の取得手順を体系化する能力、(2)英文の多読とスキミング、プレビューの能力と、英語によって提供される情報を読み解くリテラシー、(3)現代の社会問題を議論する時に必要となる基本的語彙力。これら3つの能力によりアカデミックピックス(ACADEMIC PICS)の基礎を修得する。</p>	
	英語Ⅱ	<p>演習方式で行う。グローバル社会で情報発信するためには、クリティカル・シンキング(論理的問題解決能力)と対話を通じたアーギュメント能力が不可欠である。本講座では、国際コミュニケーションにおいてアポリアとされるトピックを複数とりあつかい、議論をおこなうための基礎的発信力を育成する。ここでいう基礎的発信力にまつわる能力とは、(1)時事問題に関する英文を正確に読み取る能力、(2)英文を学ぶことを通して身につく論理的な思考力、(3)運用可能な基本語彙力と英語表現力、を指し、これら3つの能力が、アカデミックリーディングの基礎を修得する。</p>	
	英語Ⅲ	<p>演習方式で行う。国際化社会において、個人のプレゼンスの源泉となるのは、アーギュメント能力である。すなわち、他人を説得しうる明確な理由を述べて相手を説得し、納得させる能力である。時に、論理的な反論にあいながらも適切に対処し、対話を完成させることは、人間が生きていく際に最も必要とされる能力のひとつである。本講座では、様々な現代社会の問題を英語で読み、英語で考え、英語で議論するための基礎力を身につける。とりあつかうトピックについて、履修者は自分のスタンスを明らかにし、主張の根拠を論理的に構築する。英語で自分の主張を発信すること、対話相手の主張を正確に理解することにより、アカデミックアーギュメントの基礎を修得する。</p>	
	中国語Ⅰ	<p>演習方式で行う。中国語の初学者を対象に、「読む、聞く、話す、書く」という語学の四技能をバランスよく学ぶ。Ⅰでは発音の修得を第一の目標に掲げ、繰り返しの発音練習や聞き取りなどにより、正確な発音を学び、それを定着させる。また現在中国で使用されている漢字(簡体字)やその発音を表記するローマ字(ピンイン)も重要な学修項目である。簡単な挨拶などができることを目標とするが、それには中国人の風習や習慣を理解することが必要である。文化としての中国語を意識した基礎的な表現を修得する。</p>	

第Ⅰ類科目

キー・コンピテンシーゼミナール

授 業 科 目 の 概 要

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	中国語Ⅱ	演習方式で行う。中国語の初学者を対象に、「読む、聞く、話す、書く」という語学の四技能をバランスよく学ぶ。Ⅰで修得した発音を定着させるため、繰り返しの発音練習や聞き取りなどを行う。また、基礎的な文型を理解することが重要な学修項目となるが、そのためには日本語と中国語の発想の違いなどに気づくことが大切である。それはまた翻って日本の文化を見直すことにもなる。中国語で簡単な文章理解でき、日常会話ができることで、異文化を知ること目標とする。	
	中国語Ⅲ	演習方式で行う。中国語の基礎を学んだ者を対象に、「読む、聞く、話す、書く」という語学の四技能をバランスよく修得する。繰り返しの発音練習や聞き取りなどが重要である。これまでに学んだ基礎的な知識をより確かなものにしていくことが重要である。そのためには引き続き日本語と中国語の発想の違いなどに留意していくことが大切である。また、会話をスムーズに行うために必要な中国の習慣や風習などについても知識を深めていく。中国語の基礎的な知識と能力をバランスよく発揮できることを目標とする。	
	フランス語Ⅰ	演習方式で行う。フランス語の初学者を対象に、フランス語の基礎的な文法、語彙と発音を学修する。文法と語彙の授業は読む練習だけでなく、口頭でも練習する。読んで理解することが初めのステップだが、次の段階として、話す能力を身に着けるために、口頭での練習に移る。授業で習った文法と語彙を使って簡単な会話を行う。最初は文字と発音の関係を重視する。フランス語の基本構造を理解し、簡単な表現ができることを目標とする。あわせてフランス文化への理解を深める。	
第Ⅰ類科目	キー・コンピテンシーゼミナール フランス語Ⅱ	演習方式で行う。日常用いられている簡単なフランス語表現を通して、フランス語の読解に必要な文法を修得する。発音の修得と動詞の活用の習熟を中心にフランス語を段階を追って学んでいながら、フランス語と日本語の相違、フランス人と日本人のものの見方や捉え方、文化や社会の違いに着目し、異文化であるフランスとフランス語を理解すると同時に、日本と日本語をより深く理解すること目標とする。	
	フランス語Ⅲ	演習方式で行う。フランス語の基礎を学んだ者を対象に、これまでに学んだ基礎的な知識をより確かなものにしていくため、「生きたフランス語」を学ぶ。フランス語のセンスをつかむために会話と文法をバランスよく学んでいく。その題材として絵画や料理などフランス文化を用いる。フランス語文法の全体像をつかみ、発音の基本をおさえて簡単なフランス語会話ができることを目標とする。加えてフランス文化の様々な側面を理解する。	
第Ⅱ類科目	学部共通部門 社会共学生論	講義形式で行う。共生社会の理念の理解と、その実現に向けた基本的知識を身につけることを目標とする。多様な人々がともに生活を営む現代社会では、「共生」が大きな課題となっている。人権の尊重は国際的な社会規範であるが、自分と異なる他者へのまなざしは、時として排除と結びつきやすく、共生社会の実現の大きな阻害要因となる。また、自然や地球など私たちの生活する環境への共生を考えることも、持続可能な社会の実現のためには不可欠な視座である。本講義では、現代に生きる私たちが経験する、労働、在日外国人、教育、観光、環境、福祉、宗教といった地域社会の発展・構築に欠かせない種のテーマにおいて、排除と包摂の問題を学ぶ。	
	社会学概論	講義形式で行う。社会学の基本的な命題と概念を学ぶことを通じて、社会の仕組みと成り立ち、さらには現代社会の構造を理解し、さまざまな社会現象に対する社会的なものの見方を身につけることによって、これから学ぶ公共政策学の知識基盤としての役割を担うことを目標とする。社会学における社会の捉え方の特徴やその基礎となる概念について、具体的な事例政策やトピックスを題材に社会学の枠組や理論について解説を繰り返していく。世界の大きな動きの中における、日本社会の変化や、日本社会が抱える公共政策に係る問題や課題解決についてを、社会学の視点に立って思考できるようにすることを目標とする。	
	経済学概論	講義形式で行う。経済学の基本的な考え方を把握し、公共政策学を学ぶための基盤知識としての経済学を学ぶ。経済学の対象である経済は、身近でありながら具体像が目に見えにくい。そこで現実の経済社会を理解することを目指して、経済学の骨格をなす体系であるミクロ経済学とマクロ経済学の理論、公共経済学や厚生経済学の考え方、さらには経済社会にあるさまざまな仕組みを理解するために財政の仕組み、金融の仕組み、インフレとデフレ、ゲーム理論などといった経済を理解するための基礎的な用語について学ぶ。	

## 授 業 科 目 の 概 要

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第 I  基 礎 部 門	社会統計学	講義形式で行う。社会調査に必要な統計学の基礎的な知識を身につけることを目標とする。尺度と変数、度数分布表やヒストグラム、基本統計量など社会調査にかかわる基礎的な事柄を理解し、クロス集計表、相関係数による分析などデータ分析の基礎を学ぶ。またサンプリングに関わる基礎的な確率論や、カイ二乗検定など統計的仮説検定について理解することを目指す。分散分析、重回帰分析、ロジスティック回帰分析など多変量解析についても、その特徴と注意すべき点を理解し、公共政策に関わるデータを統計処理する際に、適切な方法を選択できるようになることを目標とする。	
	社会調査法	講義形式で行う。社会調査法全般について概観し、様々な調査法の特徴を理解することを目指している。社会調査法の種類、それぞれの利点、欠点を学び、実際の問題について、データを集めるために最適な方法を選択できることを目指す。また公共政策に関する住民アンケートなど、量的調査を実際に行うために必要とされる、調査の企画、設計、調査票の作成、サンプリング、実査、分析までの各段階を学び、調査を行うための基礎的な能力を身につけることを目標とする。	
	公共政策のための政治学	講義形式で行う。公共政策学を学ぶための基盤知識としての政治学を学ぶ。近代の政治思想から現代政治学の概観を通じて、政治学の基本的な知識および考え方を修得する。近現代の思想家や政治学者たちが、政治や民主主義の思想などについてどのように論じてきたのかを学び、また、日本の政治の基礎的な制度の概要を学ぶことを通じて、学生が自分自身と政治との関係性を見直し、今日の政治に関わる諸問題に気づき、考察し、分析する力の基礎を養い、政治に興味と関心を持つようになることを目標とする。	
第 II  基 礎	公共政策のための法律学	講義形式で行う。公共政策学を学ぶための基盤知識としての法学を学ぶ。法律に関する基礎的な概念・知識を修得することを目標とする。法律へのかかわり方、法律の体系、法律の適用と解釈、紛争解決の態様等について学ぶ。具体的には、憲法、民法、刑法、商法、刑事訴訟法、民事訴訟法それぞれが扱う基本的な用語や考え方、これまでの具体的な判例を解説する。さらに、国際法、消費者契約に関する法律、経済や企業経営に関する法律等についても、話題となっている時事ニュースや判例などを参照しながら関連する法律知識を修得する。	
	公共政策のための行政学	講義形式で行う。公共政策学を学ぶための基盤知識としての行政学を学ぶ。行政とは何か、行政の制度はどのような考え方に基づいて作られているのか、現実の行政活動はどのような原理に従って展開されているのかを学ぶ。様々な時事問題を取り上げて、政策に関する理解を深め視野を広げる。行政の制度・組織・活動に関する理論的な基礎知識を修得するとともに、実社会の様々な時事問題を公共政策と関連付けて理解できるようになることを目標とする。	
	公共政策のための財政学	公共部門の経済活動に関する仕組みを学修することを目的とする。公共財、外部性、情報の非対称性などが原因で、財やサービスの供給できない「市場の失敗」に対して、公的部門が公共サービスを提供することを理論的に理解することを目標とする。その上で財政の基本的な制度・仕組みなどを学びながら、福祉や介護、医療、教育、年金、文化、国防、司法、警察、公共投資など公共サービスの供給のあり方を学修する。租税や公債発行によって財源を調達するが、巨額の政府債務、高齢化による社会保障費の増大、地方への交付金の増加などによる財政上の課題も議論する。	
	公共政策のための情報学	講義形式で行う。公共政策学を学ぶための基盤知識としての情報学を学ぶ。情報の獲得・表現・蓄積や流通・検索など、情報が発生し、収集・処理、加工され、活用される過程を学修の対象として取り扱う。その中でも、とりわけ、情報を媒介するマスメディアからミドル、個人メディアまで、幅広くメディアの役割や存在意義、可能性や課題を検討するとともに、地域生活における情報の役割を理解し、その加工、流通に適切に関わることのできる基礎能力の涵養を目標とする。特定情報に関して、それが流通するプロセスを受講者が追いかけて、分析することで、メディアの構造や、情報伝播の原則を概ね理解できる演習も行う。	

## 授 業 科 目 の 概 要

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
類 科 目	履 部 門		
	公共政策原論	講義形式で行う。公共政策全般や行政機構のしくみ・役割についての基礎的な知識を修得することで、これから学ぶ各部門に関わる公共政策についての理解の基盤を構築することを目標とする。「公共的問題を解決するための解決の手段」である公共政策に関わる基本的な概念や理論を学ぶ。また、実際の公共政策において、どのように課題設定が行われ、課題解決のための政策が形成され、実施され、評価されるのか、様々なアクターが各過程にどのように関わり影響を与えるのか、公共政策の全体像を概観し、基本的な知識を修得する。	
	公共政策の基礎 A (市民教育論)	講義形式で行う。シチズンシップの在り方について、基本的な概念を理解することを目標とする。民主主義社会の成熟度は、構成員たる市民の民度の水準によって定まる。それは現代の多くの国々でポピュリズムが台頭し大きな混乱を招来している状況にも投影されている。「地方自治は民主主義の小学校」とは昔から言われてきたことだが、現在の地方自治においては従前よりさらに強い市民の関わりが求められる。市民はそれぞれの置かれた立場のもとでどのようなシチズンシップを発揮すべきなのか、またそのためにどのような知識や能力を身につける必要があるのか等について講義する。ケーススタディも絡め、個人の権利と責任、価値観の多様性、地域社会における人間関係などの諸要素と関連付けながら理解を深める。	
	公共政策の基礎 B (過程論)	講義形式で行う。政策過程に関する議論および基礎的な理論を理解することを目標とする。公共政策の特徴を踏まえ、中央・地方政府と行政の役割、公共政策の構造からみた政策過程の全体像について解説をしていく。国および地方自治体における実際の政策の中から具体的な事例を複数取り上げ、政策過程における政府、行政、市民、企業といったセクター間の協働や連携の実態と課題を提示し、公共政策においては市民参加・協働型の政策過程が特に重要であるということについて理解することを目標とする。	
公共政策の基礎 C (実践論)	講義形式で行う。国および地方自治体が多様な政策問題を抱えているということについて理解することを目標とする。現代の日本が抱えるさまざまな諸問題、例えば少子高齢化問題、格差問題、貧困問題、地方の過疎化問題、雇用問題、医療問題、教育問題等について、それらにどう政策としてアプローチしていくか、問題を解決する政策にはどのようなものが当てはまるか、政策をどう実践していくべきかについて、具体的に考えることができるようになることを目指す。地方自治体における実際の取り組みをケーススタディとして取り上げる。		
基 礎 部 門	公共政策の基礎 D (分析・評価論)	講義形式で行う。ある地方自治体における具体的な公共政策を実際に分析する試みを重ねる作業を通じて、実務に根差した政策分析のツールを体得することを目標とする。政策分析とは、実際の公共政策決定に影響を与えることを目的に問題解決に焦点を置くものであり、独創性よりは分析の信頼性や確実性が望まれる。そこで、まずは統計資料の読み方や先行研究レビューの方法を解説する。その後、問題定義、証拠収集、政策代替案の設計、評価基準の選定、結果の予測、政策代替案の比較分析、政策提言の決定、発表、という政策分析を一連の手順に即して学ぶ。	
	公共政策の基礎 E (合意形成論)	講義形式で行う。地域づくりの主体は多様であり、住民をはじめとして、行政、学校、企業、NPO、地域外の参加者など実に多くの主体がかかわっており、それらの交流は従来なかった活力を地域に与えてくれる。一方で、主体間の意思疎通、合意形成がうまく図られないことが地域活性化の阻害要因となってしまうこともある。地域づくりを進める際の基本要素である合意形成の基盤としてコミュニケーションを捉え、価値観、立場、文化などの背景が異なる組織での協同活動、地域や主体、事業ごとの特徴を検討しながら、地域づくりを効果的に推進していくためのコミュニケーションのあり方について理解を深め、合意形成のための基本的な知識・方法を修得する。	
	経済政策基礎論	講義形式で行う。基本的な地域経済分析の理論、構造を学ぶことを目標とする。現実の地域に関する課題を理解し、分析するための科目である。都市の成立や発展、地域成長、産業立地、地域間交易、地域間格差、人口移動、土地利用、住宅政策、交通の課題、環境問題、地域政策、国土政策などのテーマを取り上げる。また日本の地域構造、地方分権、地域産業や産業クラスター、社会資本整備についての知識も学修する。地域が発展するための成長メカニズムを理論的に学修し、生産性上昇に向けた活動や政策を考究する。地域発展は人材、技術、資本などの地域資源がどのように結合することで実現するかを議論する。	

# 授 業 科 目 の 概 要

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第Ⅱ類科目  領域基礎部門	環境政策基礎論	講義形式で行う。環境政策の基礎的な内容の全体像を理解することを目標とする。環境をめぐる発生している問題やその改善に向けたさまざまな取り組みの中から、日本国内の環境問題、国際社会での取り組み、日本における環境法・環境政策の展開、などの観点から具体的なテーマを取り上げる。環境問題であればそれぞれの問題がどのように発生し、現象としてどのように拡大してきたか、そしてそれらへの取組がどのように開始され、展開し、場合によっては解決してきたかについて、さらに環境問題の現状や根源的な解決に向けた課題はなにか、等について学ぶ。	
	福祉政策基礎論	講義形式で行う。地域福祉における国家・自治体の責任と役割を理解し、当事者参加や住民参加の福祉計画のあり方を説明できるようになることを目標とする。地域の福祉政策における国家・自治体の責任と役割、福祉行政の組織・専門職の役割、福祉財政の意義と行政との関係、財源構造などの内容とその課題を扱う。また、国家・自治体の福祉政策、住民参加型の地域福祉推進のために策定され、福祉需要の広範化を反映して複雑化する各種福祉計画について、その意義と目的、歴史的展開過程や法的規定、そしてその実態とその課題について説明する。	
	観光政策基礎論	講義形式で行う。観光政策に関する現状と課題、今後の方向性を理解することを目標とする。明治以降の観光政策の歴史を振り返り、特に戦後の経済政策・国土政策の変遷と観光との関連、バブル経済とリゾート政策、その後の地域振興政策（過疎、離島、半島など）、また近年の観光立国推進から地方創生に至る成長戦略としての観光政策まで、政府並びに地方自治体（行政）にスポットをあて、事例を交えながら基本となる政策を理解する。	
	教育政策基礎論	講義形式で行う。行政や市民団体等の立場で地域づくりに関わる際、教育の視点も併せ持ち、より複合的な仕掛けを構築できる資質を高めることを目標とする。地域社会の仕組み、保護者を含めた地域住民の意識や行動様式等が、該当地域に生まれ育った次世代の意識・行動様式・能力、学校教育の在り方等に対してどのように影響するか。逆に、そこで生まれ育った次世代が地域や学校で身につけた意識・行動様式・能力等が地域社会の仕組みや活力等に対してどのように影響するか。相互の関連性や全体像について、グループワークにより種々の事例を分析・俯瞰するプロセスを織り交ぜつつ、理解を深めさせる。	
	コミュニティ政策基礎論	講義形式で行う。コミュニティ政策に関する基本的な概念を理解することを目標とする。我々はどこかに定住する限り、ある地域社会に所属することになる。地域社会の弱体化・希薄化が指摘されているが、高齢化や人口減少が進むなかで、セーフティネットとして地域社会の重要性が見直されてきている。社会システムが大きく変化しているこの時代に、我々が生活上で直面する諸課題に地域社会はどう対応できるのか、ひいては我々にとって生き心地の良い地域社会はどうしたら実現できるのかを学ぶ機会としたい。コミュニティ形成にあたっては、現場の実践知が不可欠であることから、実際に活動しているゲストスピーカーも招く予定である。	
領域基礎部門	労働政策基礎論	講義形式で行う。働き方改革政策についての分析・考察を通じて、公共政策の立案・遂行に必要な視点を培うことを目標とする。少子高齢化、産業構造の変化、技術革新、グローバル化、価値観の多様化が進展する中、労働者一人一人の働き方についても大きな変化が生じている。「働き方改革政策論」においては、働き方をめぐる様々な変化に対応するための政策について学ぶ。労働者の働き方やキャリア形成のあり方の変化、これらの変化に応じて生じたニーズや課題、ニーズへの対応や課題解決のための政策、今後見込まれる変化と政策の方向性といった諸点について理解を深める。	
	文化政策基礎論	講義形式で行う。グローバル化時代の多文化社会において必要とされる人間力と社会力を身につけることを目標とする。近年の世界情勢をみると、紛争・戦争による大量の難民流出問題、ジェンダー不平等と女性を取り巻く問題、そして発展途上国における貧困、教育、医療・福祉の問題などがある。人、モノ、情報の流通が活性化している現代、世界情勢について理解するのみならず、多様な文化的背景を持つ人々と協働し、問題解決に向けパートナーシップやリーダーシップを発揮して行動を起こさなければならない。本講義では、多文化社会のガバナンス（法的課題）、ジェンダーと人権、紛争と平和、発展途上国支援（地域を支えるマネージメント）などを学ぶ。	

**授 業 科 目 の 概 要**

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第Ⅱ類科目  ゼミナール部門	基礎ゼミナールⅠ	演習形式で行う。1年次の第1クォーターに履修する「基礎ゼミナールⅠ」は、公共政策学科で学修を進めていく上で必要不可欠な能力の基礎を身につけることを目標とする。大学での学修には一定の作法が存在することを知ら、ということを目指し、演習形式で展開する。具体的には、分野領域ごとの専門領域の導入的な内容を扱い、文献読解、レポート作成、プレゼンテーション作成、報告・発表、ディスカッション技術、等により学ぶ。これらの能力は、2年次からの専門科目の学修を効率的に進めていくために不可欠なものである。	
	基礎ゼミナールⅡ	演習形式で行う。1年次の第2クォーターに履修する「基礎ゼミナールⅡ」は、公共政策学科で学修を進めていく上で必要不可欠な能力の定着を図ることを目標とする。大学での学修をすすめる上で作法を身につけることを目標に、演習形式で展開する。具体的には、分野領域ごとの専門領域の導入的な内容を扱い、文献読解、レポート作成、プレゼンテーション作成、報告・発表、ディスカッション技術、等の技法の定着を目指して学ぶ。これらの能力は、2年次からの専門科目の学修を効率的に進めていくために不可欠なものである。	
	基礎ゼミナールⅢ	演習形式で行う。1年次の第4クォーターに履修する「基礎ゼミナールⅢ」は、公共政策学科で学修を進めていく上で必要不可欠な能力を醸成していくことを目標とする。大学での学修をすすめる上で必須の作法を自分自身のものとするを目標に、演習形式で展開する。具体的には、分野領域ごとの専門領域の導入的な内容を扱い、文献読解、レポート作成、プレゼンテーション作成、報告・発表、ディスカッション技術、等の技法を用いて学修を進めることができるようになることを目指して学ぶ。これらの能力は、2年次からの専門科目の学修を効率的に進めていくために不可欠なものである。	
	課題研究ゼミナールⅠ	演習形式で行う。公共政策学科での学修を研究につなげていく上で必要不可欠なアプローチを学ぶことを目標とする。公共政策に係るさまざまな課題の中から入門的な課題を取り上げて、その研究に取り組んでいく演習形式の科目である。学内では、輪読、議論・討論、プレゼンテーション、ポスターセッションなど、学外では、分野領域ごとの専門領域に係る現場見学や実習などを行い、公共政策学の観点から、実際の課題の見方を学ぶ。	
	課題研究ゼミナールⅡ	演習形式で行う。公共政策学科での学修を研究につなげていく上で必要不可欠なアプローチを体験していくことを目標とする。公共政策に係るさまざまな課題の中から基礎的な課題を取り上げ、その研究に取り組んでいく演習形式の科目である。学内では、輪読、議論・討論、プレゼンテーション、ポスターセッションなど、学外では、分野領域ごとの専門領域に係る現場見学や実習などを行い、公共政策学の観点から、実際の課題の分析の仕方などを学ぶ。	
	課題研究ゼミナールⅢ	演習形式で行う。公共政策学科での学修を研究につなげていく上で必要不可欠なアプローチを確実に身につけていくことを目標とする。公共政策に係る課題の中から実践的・応用的な課題を取り上げ、その研究に取り組んでいく演習形式の科目である。学内では、輪読、議論・討論、プレゼンテーション、ポスターセッションなど、学外では、分野領域ごとの専門領域に係る現場見学や実習などを行い、公共政策学の観点から、課題改善のアイデアの出し方などを学ぶ。	
	専門ゼミナールⅠ	演習形式で行う。2年次の「課題研究ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ」を踏まえて、専門領域における研究課題の分布やその幅の広さやについて理解することを目標とする。ゼミナールに所属し、当該ゼミナールの専門領域が探求している課題に取り組む演習形式で行う科目である。各自がどのような探求課題を設定するかの準備として、ゼミナールの学修では、文献の講読、発表資料の作成、発表・報告、議論・ディスカッションといった手法を採用し、また現場見学などにも取り組む。	

**授 業 科 目 の 概 要**

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
ゼミ ナール 部 門	専門ゼミナールⅡ	演習形式で行う。「専門ゼミナールⅠ」における学領域の探索を踏まえて、専門領域における研究課題の焦点化の作業をすすめることを目標とする。ゼミナールに所属し、当該ゼミナールの専門領域が探求している課題に取り組む演習形式で行う科目である。各自がある程度研究課題の領域の絞り込みを行い、その分野でどのような先行研究が行われているかなどといった探求をすすめることとして、ゼミナールの学修では、文献の講読、発表資料の作成、発表・報告、議論・ディスカッションといった手法を採用し、また現場見学などにも取り組む。	
	専門ゼミナールⅢ	演習形式で行う。第2クォーターまでの研究領域の焦点化作業を踏まえて、専門領域における研究課題を具体的に設定していく作業をすすめることを目標とする。ゼミナールに所属し、当該ゼミナールの専門領域が探求している課題に取り組む演習形式で行う科目である。各自がある特定の研究課題へと絞り込みを行い、その分野にアプローチするためにはどのような研究手法を採用すべきかなどを検討をすすめることとして、ゼミナールの学修では、文献の講読、発表資料の作成、発表・報告、議論・ディスカッションといった手法を採用し、また現場見学などにも取り組んでいく。	
第Ⅱ 類 科 目	ダイバーシティ・マネジメント論	講義形式で行う。企業が女性、高齢者、障がい者、外国人など多様な人材の活用を重視するようになった理由や背景、多様な人材に活躍の場を提供する上での課題や対応策等について理解を深めるとともに、将来共生社会において様々な人材とともに働く上で必要な基本的知識の修得を目標とする。共生社会を構成する一つの要素である企業組織において、多様な人材にどのように活躍の場を提供していくのかについて学ぶ。具体的には、企業組織における人的資源管理に関する基礎的な理論を学んだ上で、企業にとって今日重要な戦略的課題である、ダイバーシティ・マネジメントについて学ぶ。	
	社会保障政策論	講義形式で行う。社会保障制度の目的、基本的仕組みを理解することを目標とする。個人や家族の生涯において、貧困・低所得、病気、高齢、失業、業務災害などは、個人や家族の生活困窮・困難を引き起こす場合がある。社会保障制度は、その社会的対応策であり、“ゆりかごから墓場まで”、健康で文化的な最低限度の生活を守ることを目的としている。本講義では、各制度の現代的課題や今後の方向性について説明する。歴史や現状を理解するために、新聞記事や関連資料を提示し、映像資料等も使用する。	
	医療政策論	講義形式で行う。医療政策の基本的概念を理解し、関係法令や制度に関する知識を修得することを目標とする。日本における医療制度の変遷を理解するとともに、現在の医療政策の概要を学び、他の先進国との比較検討を行うことによって、わが国が今後直面すると考えられる課題と対応策について考察する。特に、地域医療のあり方を中心として、医療政策の形成過程や、国・自治体・医療機関等が果たす役割と機能について理解を深め、医療政策や関連する制度が日常生活においてどのような役割を果たしているかを学ぶ。	
	労働経済論	講義形式で行う。労働市場の仕組みと機能の基本事項を理解し、現在の日本の労働市場の問題について検討を行うことができるようにすることを目標とする。労働市場に参加する主体が、どのような目的を持ち、様々な制約条件の下でその目的を達成するためどのような行動をとるか、市場参加者が取引を行うことによって、賃金、雇用量がどのように決まるか、また、この決定された賃金、雇用量などが社会にとってどのような意味を持つかを理解できるようにする。さらに、現実の労働市場には良い所得の分配、資源配分を妨げている要素、メカニズムがあることを認識し、望ましい所得分配、資源配分を達成するために、どのような制度が設けられているかを理解する。	
	地域振興論	講義形式で行う。リーダーや参加者等の担い手、自治体や企業との連携、地域住民の参画の推進などの要素を抽出し、地域づくりに不可欠な要素を体系的に学ぶことを目標とする。近年、地方都市の衰退が顕著になってきた。地区人口の減少・高齢化、地場産業の衰退、中心商店街の空洞化などの現象は都市自体の持続可能性をも揺るがす事態となっている。こういった都市の衰退は、コミュニティの崩壊に波及し、地域のアイデンティティを培ってきた祭りなどの伝統的な行事を維持にも影響を及ぼす。一方、独創的なアイデアや地域資源を生かした地域づくりの成功例もある。そこで本講義では、それらの成功例から、地域づくりに不可欠な要素を体系的に学ぶ。	

## 授 業 科 目 の 概 要

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第Ⅱ類科目 政策領域部門	地域包括ケア論	講義形式で行う。地域におけるケアのあり方について具体的な事例をもとに理解を深めることを目標とする。超高齢社会となった日本では、要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築をめざしている。また、今後、認知症高齢者の増加が見込まれることから、認知症高齢者の地域での生活を支えるためにも、地域包括ケアシステムの構築が重要とされている。したがって、本講義では地域包括ケアを政策上の観点だけでなく、当事者、担い手を含めた多角的な観点から学ぶ。	
	地域人材育成論	講義形式で行う。地域人材を育成する行政施策や地域事業の企画・運営に必要な知識・技能を修得させることを目標とする。都道府県や市町村等の持続可能性向上に資する次世代が備えるべき態度や能力は何であり、それを「どの年齢において・どのような場で」修得することが期待されるのか、学校教育と社会教育の役割分担や相互連携はいかにあるべきなのか等につき、種々の事例を交えて基礎知識を講義する。その上で、首長部局・市民団体・地縁団体等が学校教育に対してなしうる支援、自ら実施しうる社会教育事業につき、適宜のグループに分けて考案・交流させ、実現可能性や実効性を高めるための指導を行う。	
	多文化共生社会論	講義形式で行う。差別的民族意識をいかに克服できるか、そして他者と生きる技法を修得することを目標とする。今後、少子高齢化による労働力不足による外国人労働者の受け入れ、18歳人口の減少に向けた留学生の獲得により在留外国人の数は増加していくであろう。彼らの定住に伴い結婚移民や連鎖移民も増え、近い将来、隣人や同僚、そしてママ友もしくは家族の一員が外国にルーツを持つ人となる可能性がある。本講義では、自分たちとは異なる文化を持つ人との共生について具体的なイメージを持つために、文化と社会の関係、越境する文化そして世界の中の日本について学ぶ。	
	スポーツ振興論	講義形式で行う。地域におけるスポーツ振興の現状と将来の方向性について、変化のポイントを把握し、客観的に述べるができるようになることを目標とする。国内外のスポーツを利用した地域振興に関する事例を紹介したうえで、それらの成果や課題について学生相互の討議を重ね、具体的な提案をまとめる。授業を通じて、今後の地域におけるスポーツ振興のありかたについて考察し、スポーツを通じた地域社会の発展に貢献する知識を修得する。	
	スポーツ政策論	講義形式で行う。国や地域におけるスポーツ政策の意義と形成過程、政策実行の仕組みを理解し、スポーツ政策が地域振興に与える効果や今後の展望等について、幅広い視点から検討できる能力を身につけることを目標とする。国や地域が行っているスポーツ政策や関係法令、関連する審議会の答申等について、国内外の事例との比較検討を行う。また、スポーツ政策の形成過程や、国・自治体・スポーツ関連団体・民間企業が果たす役割と機能について理解を深め、スポーツ政策や推進計画の策定に必要な基本的知識を修得する。	
	文化資源論	講義形式で行う。これからの社会において、地域コミュニティの中で寺院や神社が担うべき機能、人的交流を通じた地域振興への貢献などを考えることを目標とする。西洋において教会が巡礼の地とされ、地域の象徴とされてきたように、日本においては寺院や神社がながらもコミュニティの核、観光資源としてその役割を果たしてきた。一方、社会構造の変化とともに、これらの信仰の場としての機能も変容しつつある。また、資源化をめぐって、寺院や神社の信仰共同体と行政や企業との合意形成のあり方も問われている。本講義では、長い歴史の中で培われてきた、宗教伝統、民俗芸能といった地域の文化資源の保護・継承・活用の事例を紹介しながら学ぶ。	
	文化とメンタルヘルス	講義形式で行う。移住者の定住において不可欠なメンタルヘルスの問題とその支援について理解を深めることを目標とする。地域の活性化において人の流通は不可欠なものとなっている。しかしながら移住のプロセスにおいて、人はメンタルヘルスの問題を抱えやすい。ホスト社会の態度により孤立感や不全感を募らせストレスから病いに発展する人もいよう。メンタルヘルスには個人や家族の文化とそれまで生きてきた社会の文化的価値観が影響を及ぼす。彼らの病いの説明モデル、支援探索行動、治療文化を理解、尊重することは移住者のホスト社会への文化適応を促進させる。以上の要点を抑えながら、上記の目標達成に向けた理解を深める。	

## 授 業 科 目 の 概 要

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	グローバルビジネス論	講義形式で行う。グローバル共生社会の成立における経済活動、そしてマーケティング戦略において文化や宗教の多様性をいかに意識すべきかについて学ぶことを目標とする。よりよい市場を求め日本企業のグローバル化が加速している。有形・無形財を市場へ効率よく提供するためにもマーケティングは不可欠であるが、人々の価値観の変化とともに企業からの働きかけ、消費者行動は目まぐるしく変化している。その変化と普遍性のある事柄を捉え、人を軸にマーケティング理論を理解することがグローバルビジネスにおいて必須である。以上の要点を抑えながら、上記の目標達成に向けた理解を深める。	
第Ⅱ類科目 政策 領域 部門	人間環境概論	講義形式で行う。現在人類が直面している様々な環境問題を、45億年の地球史的な時間軸とさらに先進国から途上国政府、国際機関、企業、NGOまで含む現在のグローバルな社会経済環境の幅広い視点の中で捉えることができるようになることを目標とする。人間と環境の関係をめぐる思想は時代とともに大きく変化している。近年では、新たな地質時代区分としての「人類世（アンソロポシオン）」概念が提起され、また、人間と自然を「社会生態学的システム」として一体に扱い、変化する環境に対するそのレジリエンスや適応力が焦点となってきている。本講義では、こうした最新の考え方を学ぶとともに、関連する様々なトピックスを題材とした学修や討議を行う。	
	地球環境論	講義形式で行う。国際的に発生しているさまざまな環境問題の中から、国境を越えて展開しているいわゆる「地球環境問題」の個々の問題を理解することを目標とする。講義の中で扱う地球環境問題は、「酸性雨」、「オゾン層破壊」、「地球温暖化」、「海洋汚染」、「途上国の公害」、「有害廃棄物の越境移動」、「熱帯林の減少」、「野生生物の減少」、「砂漠の拡大」の9つである。それぞれの問題が、どのように発生してきたか、発生の原因はどこにあるか、また現象としてどう拡大しどう問題が広がってきたか、そして、問題の現状や解決への方策や課題等について、最低限理解しておくなければならないと考えられることについて学ぶ。	
	環境社会学	講義形式で行う。環境社会学についての諸概念を理解することを目標とする。環境社会学とは、環境問題が起こる社会構造や人々の意識を把握するアプローチであり、この科目では環境問題が人間・社会に及ぼす影響（被害）と、人間と自然とのかかわりという2つのテーマを扱う。前半のテーマでは、水俣病に代表される公害にまつわる被害構造や食肉解体をめぐる差別構造、現代社会の消費をめぐる熱帯林破壊の問題等を取り上げ、解説する。後半のテーマでは、コモンズを通じた資源管理、生活環境主義や住民の視点からの自然環境保全の取り組みを取り上げる。	
	自然環境保全論	講義形式で行う。自然環境を保全する上で必要な知識および考え方を理解することを目標とする。自然環境をめぐる問題には人間社会のあり方が大きくかかわっており、その解決方法について考える内容となる。具体的には、全体を大きく2つに分け、前半では主に身近な東京周辺を事例として取り上げ、自然環境保全をめぐる問題が多様であること、そして、それぞれの原因について説明する。後半では、自然環境保全において重要な概念である「生物多様性」を取り上げ、生物多様性についての基本的知識および国内外の動向を取り上げ、どのように生物多様性を保全していくのかを実践例を取り上げる。	
	環境教育論	講義形式で行う。「環境教育」の基礎的な知識や現代においてどのような課題があるのかについて把握することを目標とする。環境を保全し、持続可能な社会を形成するために、教育や公衆の意識啓発がどうあるべきか、またそれらをどのようにそれを進めて行くべきかについて、環境教育の誕生から持続可能な開発のための教育（ESD）の発展までの歴史的な流れを踏まえつつ、その中で提示された実践されてきたコンセプトを学んでいく。また環境教育が誕生した背景、環境教育として取り組まれてきた活動の内容、環境教育に関する政策、日本における環境教育の取り組み、等について取り上げる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生物学部公共政策学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	脱炭素社会論	講義形式で行う。エネルギー学、環境学、社会学、経済学、技術というさまざまな学領域を複合した観点から脱炭素社会の概要を理解することを目標とする。現状の社会生活を営む上で、エネルギー源の確保は必要不可欠である。しかし、現状の社会活動の維持に加えて、世界的な人口増加の傾向や都市化拡大に伴い、地球温暖化問題が顕在化してきている。この講義では、地球温暖化を中心としたこれらの課題に対して、二酸化炭素排出の低減化や脱炭素化にむけて、世界規模での目標設定や取り決め、行動指針や実際の取り組みについて、具体的事例や脱炭素社会の在り方についてのイメージの持ち方を含めて理解する。	
	環境経済学	講義形式で行う。環境問題について、主として経済学的見地に基づいて学ぶことを目標とする。環境問題をめぐっては様々な見方が現代において存在する。環境経済学の特徴は、そういった問題を、費用や便益といった経済行動を軸に読み解こうとする点にある。環境問題は必ずしも経済学的見地に基づいて全て理解できるわけではなく、排出権取引など経済活動が色濃く反映されたシステムも多くみられるのも確かである。複雑に利害関係が絡みあう環境問題について経済的な視点から理解することを目標とする。	
第Ⅱ類科目 政策領域部門	環境法	講義形式で行う。環境基本法の体系、代表的な公害規制法の仕組み、公法的なアプローチと民事法的なアプローチの違い、環境アセスメントと経済的手法、環境紛争処理、国際環境協力等をの概要を理解することを目標とする。環境問題は、深刻化・複雑化・グローバル化しつつあり、人類の生存基盤をも危うくしかねない差し迫った課題である。環境問題を解決するためには、あらゆる分野の考え方とアプローチが動員される必要がある。本講義では、環境問題のあり方を国際的に理解し、法の枠組みを通して、予防重視に立った環境管理の手法と事後処理としての環境紛争解決、さらにODAなどで議論されている環境社会配慮のあり方について概要を理解する。	
	観光資源論	講義形式で行う。観光資源に関する現状と課題、今後の方向性を理解することを目標とする。観光資源をめぐり基礎概念と考え方を学んだのち、観光振興における観光資源の発掘・活用方法と、持続可能な観光を実現させるための観光資源の保全などについて、国内外の観光地の事例を用いながら具体的に考察する。授業の理解を確実にし、観光資源に対する理解を深めるため、身近な地域資源の観光利用について個人調査を実施し、調査結果を取りまとめたうえでプレゼンテーションを行う。	
	観光まちづくり論	講義形式で行う。観光まちづくりの基礎概念と目的を学修し、まちづくりと観光が融合した社会背景とその社会的・経済的意義について理解を深めることを目標とする。観光まちづくりという概念が一般的に認識されるようになったのは、2000年以降のことであるが、早くから地域課題の解決のため観光を導入した地域もある。全国各地で行われているまちづくりの事例を紹介しながら、観光まちづくりにおける意識醸成、役割分担、求められる人材像等の諸課題について考える。観光まちづくりの基礎概念と手法を学修し、全国各地で行われている観光まちづくりの事例を具体的に解決することを目標とする。少子高齢化社会において、地域課題を解決するために自然、歴史、風土といった地域資源を活用した「まちづくり」が行われ、様々な実践が全国各地で展開されている。そこで生じた問題点や課題を抽出し、それをどのように解決していけば良いかについてグループワークを実施し、最終的にプロジェクト企画案として纏める。	
	観光マーケティング論	講義形式で行う。観光マーケティングの手法とプロセスを理解することを目標とする。旅行者ニーズの多様化やインターネットの普及、持続可能な観光形態への希求など、時代の変化とともに観光スタイルも変化しつつある。これら多種多様な旅行者のニーズを的確に捉え、旅行者の満足度を向上し、「持続可能な観光」を発展させるためには「マーケティング」の発想が必要不可欠である。この授業では、「マーケティング」についての基礎的な理論を把握したうえで、観光産業における具体的な事例を交えながら学ぶ。	

**授 業 科 目 の 概 要**

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	観光産業論	講義形式で行う。観光産業の歴史の変遷や観光産業の有するさまざまな特性、観光産業の多種多様な担い手、観光領域の拡充とその将来像などについて幅広く学ぶことを通して、観光産業の構造と内実を総合的に把握する能力を身につけることを目標とする。観光産業の基底となるのは、人と人を結びつける「交流」である。各地域が観光産業の振興にあたって、どのような仕組みと手法によって交流促進を実施しているのかについて、実例に基づきながら学修する。	
	観光国際比較論	講義形式で行う。日本での観光振興を相対化しその特徴と課題を考えることを目標とする。21世紀は「国際観光の時代」ともいわれ、世界各国で多様な観光実践が行われている。地球規模での人的移動が加速しつつある現在、日本でもインバウンド観光が日常的にみられる現象になっている。本講義では、世界観光機構（UNWTO）が発行する観光白書等の資料を活用し世界の観光情勢と将来を理解する。それに加えて、イギリスやイタリア、中国等の諸外国の観光実践について、映像等の媒体を使いながら学修する。	
	スポーツツーリズム論	講義形式で行う。スポーツを「する」、スポーツを「みる」、およびスポーツを「ささえる」という視点から、スポーツにより生じた人の移動と地域への影響について理解することを目標とする。まず、「するスポーツ」として、合宿地の形成、マリンスポーツおよびランニング・ブームを取り上げる。次に、「みるスポーツ」として、ボールパーク、プロとファンの関係などについてみていく。さらに、「ささえるスポーツ」として、イベント・ボランティアおよびクラブ・ボランティアをあげる。最後に、スポーツと地域の関係とスポーツツーリズムの役割について考察する。	
	観光プロモーション論	講義形式で行う。いかにして効果的に地域観光をプロモーションできるかについて考え、企画・立案する能力を身につけることを目標とする。経営学におけるプロモーションの一般的理論と手法を学んだ上で、東京オリンピック・パラリンピックを契機に注目度が高まりつつある日本における観光プロモーションの諸活動について、実例に基づいて解説する。観光にかかわる行政、地域、諸団体のプロモーション事業を概観し、その役割と効果、問題点について考察する。	
	フィールドワーク I	実習形式と講義形式で行う。1年次の第3クォーターで実施する。本科目の目的は、公共政策に関連する理論を本格的に履修する前の段階で、基本的なフィールドワークの作法、テーマの設定方法、地域での観察方法、聞き取り調査やアンケートの実施手法、資料の収集方法等の基本的な知識を体験的に身につけることである。実際のフィールドワークは、実質4週間（20日、延135時間）を予定している。 1週目は、学内においてガイダンス及びフィールドワークに関連する基礎理論の修得を中心とした事前学修を講義形式で行う。2週目及び3週目は学外でのフィールドワーク（前半）を実施し、4週目に学内で中間報告会と報告書の作成を講義形式で行う。その後、5週目及び6週目に再び学外でのフィールドワーク（後半）を実施したうえで、7週目に学内で事後報告書の作成及び公開による成果発表会を講義形式で行う。なお、2週目及び3週目のフィールドワーク（前半）は首都圏地域において実習形式で実施する。指導は、担当教員に加えて専属のチューターを配置する。5週目及び6週目のフィールドワーク（後半）は、地方地域の自治体の協力によって2週間のインターンシップ型の実習形式で実施する。指導は前半と同様とし、担当教員に加えてチューターが巡回指導を行う。学修時間は事前、中間及び事後学修（講義形式）で延45時間とし、フィールドにおける学修（実習形式）で延135時間とする。	講義 4.5時間 実習 13.5時間

**授 業 科 目 の 概 要**

(社会共生物学部公共政策学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第Ⅱ類 科目  実践 部門	フィールドワークⅡ	実習形式と講義形式で行う。2年次の第3クォーターで実施する。本科目の目的は、2年次の第1クォーター及び第2クォーターで学んだ公共政策学の基本知識と1年次に実施した「フィールドワークⅠ」の成果を統合し、自ら学修テーマを設定したうえで現地における応用力を養うことである。実際のフィールドワークは、実質5週間(25日、延180時間)を予定している。1週目は、学内においてガイダンス及びフィールドワークに関連する応用理論の修得を中心とした事前学修を講義形式で行う。2週目から6週目にフィールドワークを実施し、実施地域は1年次と同様に前半を首都圏地域、後半を地方地域とする。7週目に学内で事後報告書の作成及び公開による成果発表会を講義形式で行う。本科目は、自らが設定した学修テーマに則った対象の調査活動を実施する。その計画を円滑に実施するため、担当教員及び専属チューターによる巡回指導を行うほか、現地で採用したフィールドワーク指導講師及び生活指導員が連携してサポートする。特に後半のフィールドワークについては、全国の連携自治体(全国70自治体との連携協定による)との協力によって実施されるもので、実際の行政の現場においてインターンシップ形式で行う。学修時間は事前及び事後学修(講義形式)で延30時間とし、フィールドにおける学修(実習形式)で延180時間とする。	講義30時間 実習180時間
	フィールドワークⅢ	実習形式と講義形式で行う。3年次の第3クォーターで実施する。本科目の目的は、1年次及び2年次に実施してきたフィールドワークで創出した実践知を応用する能力を身につけることである。自らが設定した学修テーマをさらに深めるため、これまで収集したデータや情報をもとに理論と実践について体験を通じて学び、政策領域に関するケーススタディーやPBLなどを活用し、課題解決への道筋を学ぶ。特に後半のインターンシップについては、課題解決型学修の一環であることを学生が自覚し、地域の受け入れ機関の協力を得て個々の政策課題とその解決策を提案し、実践の場における行動の中から体験的に学修できるよう指導する。授業の形態、方法及び時間配分は「フィールドワークⅡ」と同様である。本科目はフィールドワーク科目の最終年度にあたることから、これまで指導に携わった多くのステークホルダーの参加のもとに報告会を実施する。	講義30時間 実習180時間
	海外フィールドワーク	実習形式で行う。公共政策分野に係る海外の現場における実情を理解することを目標とする。長期休暇中の集中科目として設定される海外フィールドワークは、国内での学修や実習で高いポテンシャルを示すことができる学生を対象に、その中でも特に発展的な学修を海外で深めたいという意欲が高い学生のみを対象としている。海外フィールドワークを担当する教員が設定する海外での体験学修やフィールドワークへの参加を通じて、公共政策分野に係る海外の現場における実情の理解や課題解決の方策、などといった発展的な学修の機会を得ることができ、より広い視野を獲得することにつながる。期間は講義としての事前学修、事後学修15時間、海外滞在日数2週間以上。	講義15時間 実習45時間
	卒業研究	4年次に履修する卒業研究では、自身が所属する専門ゼミナールで各自が設定した課題に即し、論文を作成する。その際、1年次の基礎ゼミナール、2年次の課題研究、3年次の専門ゼミナールで獲得したアカデミックスキルと、公共政策学科で履修し獲得した知識、そしてフィールドワーク・インターンシップ・テーマ研究の経験を踏まえて、自らが設定した課題の分析作業に取り組み、論文として質を高め完成させていく作業を行う。また、社会人として求められる資質を再確認し、社会生活を順調に送るための心の準備と、求められるスキルの準備を万全にする。	

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の出発定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生物学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第I類科目 人間	人間の探究A-I（哲学する人間）	3クォーター（6単位：100分授業、週2回）にわたって「哲学する人間」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。日常生活において、心は何かをいつも感じている。喜怒哀楽に限らず、ちょっとしたことにでも感性は働くものである。この「感じる」とは何かという問題を通して哲学的思考をめぐらせ、広い視野で「感じる」ということを理解できるようにする。また、哲学的な思考法の基礎を学ぶ。	
	人間の探究A-II（哲学する人間）	「人間の探究A-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。「哲学する人間」をテーマとした応用科目として開講し、「人間の探究A-I」で修得した哲学的な思考法により、生きることと考えることについて、「よく生きる」「よく考える」というのは、どういうことなのかを考えてみる。また、このことについて大学生活や自身の未来設計にどのように繋がっていくのか自分なりの答えを見つけ、論理的に述べる技能を修得する。	
	人間の探究A-III（哲学する人間）	「人間の探究A-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「哲学する人間」をテーマとした発展科目として開講し、「人間の探究A-I」で修得した基礎知識、「人間の探究A-II」で修得した応用技能を統合し、哲学の観点から知識（身につけるもの）・知恵（出すもの）の収集、統合、取捨選択を行う方法を身につける。また、大学の学びや社会で働くうえで生かすことができるかについて、自身の考えや決意を周囲と共有し、他者に理解してもらうための姿勢を身につけることを目標とする。	
	人間の探究B-I（学び方とリベラルアーツ）	3クォーター（6単位：100分授業、週2回）にわたって「学びのイノベーション」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。日本国内および諸外国における学びのイノベーション事例を概観し、イノベーションが必要となっている社会的背景である経済活動や文化活動のグローバル化、テクノロジーの発展などによる職業の世界の変化、医療革命による人生の長期化（いわゆる人生100年時代の到来）などの現状や未来にたいして行われているさまざまな予測を知る。加えて、学びのイノベーションを支えるテクノロジーや教育理論・哲学について学ぶ。	
	人間の探究B-II（学び方とリベラルアーツ）	「人間の探究B-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。「人間の探究B-I」の基盤に立ち、引続き学びのイノベーションにたいする理解を深めていく。イノベーションの実践者をゲストスピーカーとして招きながら、机上の空論ではない、地に足のついたリアルな学びの実践方法を知り、学びの世界が実際に変容していることを理解する。その上で、これからの学び方とそのイノベーションについて、自分なりの考えを深め、整理する。	
	人間の探究B-III（学び方とリベラルアーツ）	「人間の探究B-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。人間の探究B-I・IIの基盤に立ち、さまざまな学びの手法・ツール・理論・哲学を体系的に整理した上で、自らの学びをいかにイノベーションすべきか考える。大学卒業後の世界に向け、自身の大学での学び方をイノベーションする方法を構想し、日々の学修に落とし込むことを目的とする。到来しつつある人生100年時代やAI社会を、自らの学びをイノベーションし、他者とともに喜びを持って生きていける人材となることを目指す。	
	人間の探究C-I（幸福についての人生論）	3クォーター（6単位：100分授業、週2回）にわたって「幸福についての人間学」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。誰もが日常生活において、「幸せとはなにか」、「生きるとはなにか」、「人生とはなにか」について考える瞬間があるであろう。自身が幸せだと感じる瞬間、生きていると感じる瞬間について議論・討論を行い、自分の価値観を見つめなおし、自身についての理解を深める。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第I類科目 人間	人間の探究C-II（幸福についての人生論）	「人間の探究C-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「幸福についての人間学」をテーマとした応用科目として開講し、「人間の探究C-I」で見つめた自身の価値観について、さらに深く考えてみる。また、これまでの人生を振り返り、人との出会いやターニングポイントとなった出来事を見つめる。これらが大学生活や自身の未来設計にどのように繋がっていくのか、論理的に述べる技能を修得する。	
	人間の探究C-III（幸福についての人生論）	「人間の探究C-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「幸福についての人間学」をテーマとした発展科目として開講し、「人間の探究C-I」で修得した基礎知識、「人間の探究C-II」で修得した応用技能を統合し、自分にとっての「幸福」とは何かを探究し、今後の大学での学びや社会で働く意味を考える。また、自身の考えや決意を周囲と共有し、他者に理解してもらうための姿勢を身につけることを目標とする。	
	人間の探究D-I（仏教的な生き方に学ぶ）	3クォーター（6単位：100分授業、週2回）にわたって「智慧と慈悲の実践」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。日本に深く根付いている「仏教」について基礎的な知識を身につけ、「仏教」に関して基本的な知識と作法を修得することを目標とする。日本人にとって身近な宗教である「仏教」について、その成立から展開まで歴史的・思想的な概要を学ぶ。講義を通じて、日本の文化、芸術、言葉など、私たちの日常生活に溶け込んでいる「仏教」を改めて発見するほか、参加することが多いであろう仏教行事の意味を知り、初歩的な作法を身につける。	
	人間の探究D-II（仏教的な生き方に学ぶ）	「人間の探究D-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「智慧と慈悲の実践」をテーマとした応用科目として開講し、「人間の探究D-I」で修得した仏教思想に関する基礎知識をもとに、私たちの思考形成、行動に仏教がどのような影響を与えているのかを思考することを目標とする。仏教に限らず、宗教の根源はこの世に命を授かった自分が人間としてどのように生きるのかを考える点にある。この講義では、仏教思想の視点から人間の生き方にアプローチし、自身の人生における未来設計へとつなげる技能を修得する。	
	人間の探究D-III（仏教的な生き方に学ぶ）	「人間の探究D-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「智慧と慈悲の実践」をテーマとした発展科目として開講し、仏教思想に基づいて、自身が生きる意味、学ぶ意味、働く意味について自ら思考し、具体的な行動に移せることができるようになることを目標とする。「人間の探究D-I」で修得した基礎知識、「人間の探究D-II」で修得した応用技能を統合し、自身が描く大学生活での学びや、社会において働くことの意味を見出していく。また、自身の考えや決意を周囲と共有し、他者に理解してもらうための姿勢を身につける。	
	人間の探究E-I（文学にみる近代）	3クォーター（6単位：100分授業、週2回）にわたって「近代文学に表現された人間の諸相」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。まず近代文学成立の要件や「言文一致」「近代的自我」など近代文学の黎明期を彩る必須のキーワードを基礎知識として学ぶとともに、主に明治期の文学を鑑み、その「問い」の範疇を知る。またそこに表現された「個人」の姿や「欲望」の変遷を理解しながら、主人公たちが「他者」や「社会」の現実との狭間でどのような困難に向き合ってきたかを体系的に整理できる能力を身につける。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	人間の探究E-II (文学にみる近代)	「人間の探究E-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「近代文学に表現された人間の諸相」をテーマとした応用科目として開講し、主に大正期・昭和前期の文学作品を対象として、まずは「人間の探究E-I」で培ったアプローチ方法で作品分析を行う。大正教養主義やマルクス主義の影響、また女性たちの地位向上などによって「問い」のあり方や発信者の主体がどのように変わってきたかを知識・教養として身につけるとともに、近代の本質とその課題を真正面から受けとめてきた文学表現の特徴と「人間学」の内実を言語化する技能を修得する。	
	人間の探究E-III (文学にみる近代)	「人間の探究E-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「近代文学に表現された人間の諸相」をテーマとした展開科目として開講し、主に戦後文学や昭和後期、さらには平成期の文学作品を対象として、まずは「人間の探究E-I・II」同様の授業工程を経る。敗戦と復興、また高度資本主義時代の到来の中で変化していく文学表現とそこに表現された「内面」の変化を知識・教養として身につける。またこの間に触れた作品を通じて得た「問い」の教-を現代的なコンテキスト及び自らの課題として置換し、その探究のための絶好の参照資料として活用することで、他者とともに深い考察ができることを目標とする。	
人 間	人間の探究F-I (現代アートの人間学)	クォーター(6単位:100分授業、週2回)にわたって「現代アートの人間学」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングを実施する。映画や映像作品を通して美術史を学びながら、スタジオセットやロケーション美術、衣装、メイクなどの映像表現を理解する。講義を通じて「アートとは何か」を自分の言葉で説明することができ、グループ議論により他者の意見やアート感覚の違いを認め合うことで、自分の意見を深化させる。映像美術の魅力を的確に自分の言葉でプレゼンテーションできることを目標とする。	
	人間の探究F-II (現代アートの人間学)	「人間の探究F-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングを実施する。「現代アートの人間学」をテーマとした応用科目として開講し、映画や映像作品の演技を軸に映像表現を捉え、「演技とは何か」を理解する。「人間の探究F-I」で修得した美術的な観点と共に、芸術作品を構成する要素の基礎知識を修得することで、その背景を理解する。そのうえで芸術作品の表面的な表現だけでなく、その中にある人間性について考察・議論を行い、アートの社会的意義や課題を説明できることを目標とする。	
	人間の探究F-III (現代アートの人間学)	「人間の探究F-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「現代アートの人間学」をテーマとした展開科目として開講する。「人間の探究F-I・II」で修得した知識や議論をもとに、現代におけるメディア、デザイン、プロダクトといった様々なアートの持つ力やその存在意義を理解し、人や社会との結びつきを考察する。アートを通して表現される「文化とは何か」「社会とは何か」「人間とは何か」について討議し、他者とともに深い考察ができるようになることが目標である。	
第I類科目	社会の探究A-I (共生社会)	3クォーター(6単位:100分授業、週2回)にわたって「共生社会」(支え合う社会の実現)というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。ダイバーシティ(多様性)に関する基本的な概念と、日本における現状、課題について理解することを目標とする。人々の生活や人間関係にさまざまな変化が生まれている中で、多様な人々がともに豊かな生活を営み共生していくことの必要性について、諸外国の事例も交え、基本的な知識を修得する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
社会	社会の探究A-II（共生社会）	「社会の探究A-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「社会共生」（支え合う社会の実現）をテーマとした応用科目として開講し「社会の探究A-I」で修得したダイバーシティに関する基礎知識をもとに、さまざまな人間が集う大学において、他者との議論や討論の場をつくり、多様な意見に触れる機会を提供し、自分と異なる境遇や価値観を持つ他者への理解を深め、共生していくためにどのように行動すべきかを思考することを目標とする。	
	社会の探究A-III（共生社会）	「社会の探究A-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「社会共生」（支え合う社会の実現）をテーマとした発展科目として開講し、ダイバーシティ社会の中で、多様な人間の共生を実現するために自身の人生観やキャリアデザインと結び付けて具体的な行動に移せるようになることを目標とする。また、プレゼンテーション等を通じて自身の考えや決意を周囲と共有し、他者に理解してもらうための姿勢を身につけることを目標とする。	
	社会の探究B-I（超スマート社会の光と影）	3クォーター（6単位：100分授業、週2回）にわたって「超スマート社会の光と影」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「超スマート社会の光と影」をテーマとした基礎科目として開講する。第4次産業革命と言われるAIが社会に与える影響について、その技術や進化の歴史を軸に、医療、教育、法律、経営などの観点から学ぶ。講義を通じて、AIの基本的な事項を理解し、様々な観点から社会との関係について議論し、AIが与える社会的影響を考察し理解することを目標とする。	
第I類 社会	社会の探究B-II（超スマート社会の光と影）	「社会の探究B-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「超スマート社会の光と影」をテーマとした応用科目として開講し、「社会の探究B-I」で修得したAIに関する基礎知識をもとに、超スマート社会における人間の役割とは何か、AIなどの技術と人間が共存・融合した社会を創るためにはどのようにすれば良いかを考察する。この講義では、既に実用化されている具体的な事例を示し、その機能や役割を理解する。持続可能な社会を実現するために技術をどのように活用することができるのか、すべきかについて考察・議論を行い、その社会的意義や課題を説明できることを目標とする。	
	社会の探究B-III（超スマート社会の光と影）	「社会の探究B-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニング形式で実施する。「超スマート社会の光と影」をテーマとした展開科目として開講し、「社会の探究B-I・II」で修得した知識や議論をもとに、超スマート社会における人間の存在価値について、学ぶ意味、働く意味、社会のあり方を考察し、グループにて討議する。最終的に「AIは社会をどのように変えるのか」「超スマート社会時代の人間らしさとは」などのテーマで発表を行う。様々な意見や考え方を共有し、より良い社会とするための提案ができることを目標とする。	
	社会の探究C-I（近代を問い直す）	3クォーター（6単位：100分授業、週2回）にわたって「近代を問い直す」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。近代日本の出発点である幕末・明治維新から日清戦争、日露戦争、アジア・太平洋戦争に至るまでの政治・経済・外交・文化について、基礎的な事件・人物などを取り上げながら近代日本の歴史について学び、今日の日本がどのように構築されていったのか理解を深めていく。	
	社会の探究C-II（近代を問い直す）	「社会の探究C-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「近代を問い直す」をテーマとした応用科目として開講し、「社会の探究C-I」で修得した日本の歴史に関する基礎知識をもとに、現代から見て近代とはどのような時代だったのか、現代にどのような影響を与えたのかを理解する。また、生き方を参考にしたい人物を一人取り上げ、プレゼンテーションを行い、自身の未来設計へつなげることを目標とする。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共同学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
科目	社会の探究C-III（近代を問い直す）	「社会の探究C-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「近代を問い直す」をテーマとした発展科目として開講し、「社会の探究C-I」で修得した基礎知識、「社会の探究C-II」で修得した応用技能を統合し、近代史から学ぶこと、近代で起きた出来事の中から、大学での学びや社会で働くうえで生かすことができる事柄があるか考え、論理的に述べる。また、自身の考えや決意を周囲と共有し、他者に理解してもらうための姿勢を身につけることを目標とする。	
	社会の探究D-I（社会の課題を解決する力）	3クォーター（6単位：100分授業、週2回）にわたって「社会の課題を解決する力」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。社会課題解決においては、解決すべき課題の特定や定義がきわめて重要である。しかしながら、社会課題は、さまざまな近接領域の問題や、関係する人や組織、あるいは歴史・文化・文脈・利害などが複雑に絡まった結果として表出している場合が多く、その全体像や各要素の関係性をていねいに分析・理解することから解決に向けた取り組みをはじめめる必要がある。日本国内および諸外国における社会課題解決の取り組みをケーススタディとして取り上げながら、社会課題を考察・理解する方法を修得する。	
	社会の探究D-II（社会の課題を解決する力）	「社会の探究D-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。「社会の探究D-I」の内容を踏まえ、決断する力にたいする理解を深めることを目的に講義を行う。社会課題解決の取り組みは、日々「決断」の連続である。決断なくして社会課題は解決しない。その一方で、決断するために必要なすべての情報が揃うケースは稀である。多くの決断は不完全な情報をもとに行われる。そのような状況下で人はいかにすればより賢明な決断を下せるのか。理論と実例を交えながら考察する。	
	社会の探究D-III（社会の課題を解決する力）	「社会の探究D-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。この授業では、現代または未来において特に解決すべき重要な社会課題を紹介する。受講生には、「社会の探究D-I・II」の内容を踏まえ、紹介された社会課題の構造を分析し、解決に自身がいかに関与できるか考え、グループ発表してもらう。講義形式の授業だが、グループワークを取り入れるため、授業時間外にグループ活動への参加が求められる。他者と協働しながら社会の課題を解決するための知識・スキルを身につけ、活用する力を養うことを目標とする。	
社会	社会の探究E-I（ソーシャルメディアの言語技術）	3クォーター（6単位：100分授業、週2回）にわたって「ソーシャルメディアの言語技術」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。ソーシャルメディアによる情報環境の変化は、社会に大きな変化や影響をもたらしている。ソーシャルメディアに関連する歴史、技術、法の基礎を学び、ソーシャルメディアの基本的な仕組みを理解し、ソーシャルメディアを活用するための基礎的なメディア・リテラシーを修得することを目標とする。	
	社会の探究E-II（ソーシャルメディアの言語技術）	「社会の探究E-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「ソーシャルメディアの言語技術」をテーマとした応用科目として開講し、ソーシャルメディアの登場により個人の発言が容易になり、新たな社会的繋がりが生み出された。一方で、それゆえの社会的課題も多い。その二面性を理解したうえで、ソーシャルメディアを活用し、人や社会との繋がりをより良いものとするためのメディア・リテラシーである文章表現、言語技術について学ぶ。具体的な事例研究を通じてグループ討議を行い、あるべきソーシャルメディアの言語技術を修得し、適切な情報発信ができることを目標とする。	
	社会の探究E-III（ソーシャルメディアの言語技術）	「社会の探究D-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニング形式で実施する。「ソーシャルメディアの言語技術」をテーマとした展開科目として開講し、「社会の探究E-I・II」で修得した知識や議論をもとに、情報化社会におけるソーシャルメディアのあり方を考察し、グループにて討議する。その議論を通じて様々な意見や考え方を共有し、人と人、人とモノ、人と社会のあらたな繋がりを築くプラットフォームとしてのソーシャルメディアを探究する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生物学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第I類科目	自然	自然の探究A-I (地球サステナビリティ)	3クォーター（6単位：100分授業、週2回）にわたって「地球サステナビリティ」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「地球の歴史とナチュラルヒストリー」をサブテーマに、環境問題など、現在の人類社会が直面する課題について大局的な捉え方ができるようになるための基礎知識を修得することを目標とする。われわれの暮らす地球は45億年以上という歴史の中で様々な変容を経験してきた。また、そこに三十数億年前に誕生した生命は、原始の姿から現在では地球上に数千から1億種以上といわれるほどに多様な進化を遂げた。本講義では、こうした地球史的なタイムスケールのもとで、われわれの住む地球のたどってきた歴史やそこに育まれてきたナチュラルヒストリー（自然史・自然誌）について理解を深める。
		自然の探究A-II (地球サステナビリティ)	「自然の探究A-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「地球サステナビリティ」をテーマとした応用科目として開講し、「人類と自然」をサブテーマに、世界各国で現在も営まれている人間と自然の多様な文化を学び、地球規模の視野でサステナビリティについて考えることができるようになるための基礎知識を学ぶことを目標とする。現在の人類の祖先がアフリカで10万年以上前に誕生して以来、人類は世界中にその活動範囲を広げてきた。その中で、火の利用、農業の開始、化石燃料の利用による産業革命、そして現在経験している情報革命など技術の革新によって自らの社会を変えとともに、周囲の自然環境を大きく改変し、その中でいくつもの文明が栄え、また滅びてきた。本講義では、こうした人類史的なスケールから、人と自然のかかわりの歴史について学ぶ。
		自然の探究A-III (地球サステナビリティ)	「自然の探究A-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「地球サステナビリティ」をテーマとした発展科目として開講し、「人間と水・食料・エネルギー」をサブテーマに、サステナビリティに関する複合的な視野を養うことを目標とする。地球上の人口が80億を超え、2050年には100億近くになると予想される中、サステナビリティの鍵を握るのは、水・食料・エネルギー (WAtEr FOOd EnERgy NExus) と言われる。これらの要素はお互いに密接に関連しあっており、いかにこれらの三要素をバランスさせながら同時に問題解決を図っていくかが地球の持続可能性を目指す上で不可欠となっている。本講義では、こうした観点から、水、食料、エネルギーをめぐる地球的な規模の問題について学ぶ。
自然	自然	自然の探究B-I (グリーンインフラ論)	3クォーター（6単位：100分授業、週2回）にわたって「グリーンインフラ論」というテーマで開講する。本科目はその導入科目として講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングを実施する。食糧供給や気候調整、災害リスク緩和など、生態系サービスと言う言葉で総称されるように、自然は人間にとって様々な有益な便益をもたらす。こうした自然の働きをインフラの一部としてコンクリートなどによる他のインフラと組み合わせて活用していこうという「グリーンインフラ」という考え方が近年国内外で広く受け入れられるようになってきた。また、類似の概念を含めて「自然を基盤とした解決策 (NAturE-BAsED Solutions)」という概念や取り組みが急速に広まっている。本講義では、グリーンインフラやそれに関連する分野の概要について学ぶとともに、特に都市や河川、海岸におけるグリーンインフラについて事例を基にして学ぶ。
		自然の探究B-II (グリーンインフラ論)	「自然の探究B-I」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニング形式で実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングを実施する。「グリーンインフラ論」をテーマとした応用科目として開講し、講義形式。自然の探究B-Iを踏まえ、「グリーンインフラ」を含めた「自然を基盤とした解決策」についてさらに理解を深める為に、本講義では特にグリーンインフラの中でも農村地域や山村地域、保護地域等におけるグリーンインフラについて事例を基にして学ぶ。さらに、防災・減災や気候変動適応に関して、Eco-DRR (生態系を基盤とした防災・減災) やEbA (生態系を基盤とした適応) などの考え方や事例についても学ぶ。

授 業 科 目 の 概 要				
(社会共生学部社会福祉学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
第I類科目	自然の探究B-III (グリーンインフラ論)	「自然の探究B-II」に引続いて講義形式に加えて、少人数によるPBL教育を併用して実施する。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「グリーンインフラ論」をテーマとした展開科目として開講し、「自然の探究B-I・II」で修得した知識や議論をもとにグリーンインフラに関連する最新の科学的研究の成果や政策の動向について学ぶ。さらに、グリーンインフラを実装していくために必要な制度論、計画論について演習を通して学ぶ。		
	学融合の実践学I (解決力と決断力)	講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。3年次3クォーターまでに学んだ第I類科目(教養科目)と第II類科目(専門科目)を横断する学際的な科目として開講する。卒業研究は専門分野の学びの総括であるが、専門ではない学修の幅を広げるために、時代の変化に応じた学横断的なテーマを各自が設定した上で、チューターやメンターの支援を受けながら課題解決に取り組む。社会に出てからも大学での学びを活かし、生涯学び続けることを目的に、これまで学んだ手法を駆使し、様々な課題に対する解決方法を実践する。「学融合の実践学I」では「解決力と決断力」というテーマを設定し、課題解決に向けた実践計画を策定する。		
	学融合の実践学II (解決力と決断力)	講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「学融合の実践学I」で設定したテーマや手法に従って実践する。各自の実践の中間報告をケーススタディとしてグループで共有し、あわせてチューターやメンターの指導やサポートを受け、修正や改善を行う。専門分野が異なる学生とのコミュニケーションによりアイデアの創発が生まれ、お互いにブラッシュアップしながら協働し、学問的にも人間的にも成長することを学ぶ。		
	学融合の実践学III (解決力と決断力)	講義形式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「学融合の実践学II」での実践を継続するとともに、最終的な課題可決報告を行う。課題解決への取り組みを通じて、分野を超えた知の終結が必要なこと、他者と協働することの重要性を学び、自身が生涯学び続けるための学びのプラットフォームを確立することを目標とする。		
	キー・コンピテンシー	データサイエンスI	演習方式で行う。データサイエンスに関わる基礎的な知識を得ることを目標とする。データとはなにか、データが目される背景、データの所在・発生源、データ取得、データの活用領域といったデータに関する基礎知識をベースに、データサイエンスとは何か、地方、日本、世界におけるデータサイエンスの現状、データサイエンスが社会に及ぼす影響等について幅広く学び、どのような手段、手法、しくみを通じて有効に活用できていくか、その活用の可能性について理解を深める。あわせてこれらのデータが形成される過程の調査法についての知識も学修する。	
	データサイエンスII	演習方式で行う。データサイエンスの重要性とそのために必要な知識、人材について理解を深めることを目標とする。IT技術の進歩により、取り扱えるデータの種類が増え、膨大なデータ(ビッグデータ)の管理および迅速な処理が可能になり、その活用は急速に広がっている。一方、増大するデータをどのように活用するかが大きな課題ですが、様々な視点からの様々なデータは、社会に大きな変化をもたらす力を持っていることは明らかである。ビッグデータを的確に活用することで課題の発見・解決や新たな価値創出が可能となる。私たちの社会に存在するデータが、公的機関、企業、団体等によってどのように活用されているのかといった実例が、社会にどのような変革をもたらしたのか、といった事例を学ぶ。		
データサイエンスIII	演習方式で行う。公的機関や企業・団体のデータを活用し、データ分析に必要な数理・統計について理解を深めることを目標とする。データの整理(平均値、中央値、最頻値等)、データの状況(分散・標準偏差)、データ分布(四分位・パーセンタイル等)、データの関係性(相関)、データ間の関係(回帰分析)、統計数値の精度(標本分布、信頼区間)等について、実データの統計処理しながら、その値が表す意味と活用の視点について理解を深める。あわせて公表されている統計データを活用し、その統計が意味する課題や特徴の整理をおこなう能力を、演習を加えながら身につける。			

授 業 科 目 の 概 要				
(社会共生学部社会福祉学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
第I類科目	キー・コンピテンシーゼミナール	データサイエンスⅣ	演習方式で行う。基本的な統計と活用を理解した上で、実際のデータからの分析に必要な微積分、線形代数、集合・位相、確率論などへの理解を、演習を加えながら深め、データ分析技能の修得に結びつけることを目標とする。実際の統計表をみながら、統計処理によって導かれた値を使い、比率の活用、比率による分析、時系列データ、時系列データの調整、時系列データの予測などについて学び、統計分析手法（相関、回帰、分類、統計的推測等）等による検証をおこなう。	
		データサイエンスⅤ	演習方式で行う。公的統計（E-StAt, REsAsほか）や、データ分析ソフト（SASほか）、機械学修で活用される言語（R, Pythonほか）などを活用する方法を修得することを目標とする。統計学の改正手法（データ分析・データマイニング）や、テキストデータのように数値化(定量化)されていないデータを加工する手法（テキストマイニング）、機械学修(人工知能)の活用など、公的機関や企業・団体等がデータの活用の際に実践している実践的なアプローチ例を知り、ケーススタディを通じて、仮説から導く検証、データの解析結果から導く仮説・解決策を、演習を通じて身につけていく。	
		データサイエンスⅥ	演習方式で行う。ビッグデータや個別のデータを活用したデータサイエンスによる分析(データサイエンスⅠ～Ⅴでの学修内容)を通じて、問題・課題の発見、解決方法を理解することを目標とする。実際の事例に基づくケーススタディをおこなった上で、ビッグデータを活用した社会的な課題、ビジネス的な課題、地域間の課題などのデータ分析、およびフィールドワークやインターンシップ等をおこなう地域(自治体、公的団体等)・企業等のデータを活用したデータマイニングを通じて、課題の発見と解決策の構築について、演習を通じて学び、提言につながる学修をおこなう。	
		コミュニケーションⅠ	演習方式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。コミュニケーションについての定義及び実践について理解することを目標とする。特にコミュニケーションが成立したという状態はどのようになっていることをいうのか、ということについて、知覚・感情・思考の伝達という視点から学ぶ。次にコミュニケーションの基礎である言語技術の修練法について述べる。また、その実践として、会話の前段階である文章技術を鍛えるためのトレーニングをチューターのサポートを得て実践する。	
		コミュニケーションⅡ	演習方式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。「コミュニケーションⅠ」で学んだコミュニケーション理論(概況)の理解を深めることを目標とする。言語技術(言語を使って他者に語りかける)という視点から、次の各項目についてトレーニングをおこなう。 ①日常生活の挨拶、会話(電話を含む)について、マナーを含めてトレーニングする。 ②スピーチ、討論、ディベート、ファシリテートなどの実践を教室やラーニングコモンズを利用して実践する。 ③メール、SNS、手紙の文章技術など様々な分野について構築し、演習形式で実習(トレーニング)を行う。	
		コミュニケーションⅢ	演習方式で行う。適宜、議論・討論やプレゼンテーションを交え、アクティブラーニングで実施する。自ら考えていることを相手に正確に伝え、相手を説得(交渉)できるようになることを目標とする。そのためには言語技術の向上が必須事項であることから、「コミュニケーションⅡ」に引き続いてスピーチの前に徹底的に読み、書く必要性を認識し、習慣化を実践する。そのため多くのチューターを配置して授業運営をサポートする。本講義の目標とするところは、コミュニケーション技術を高めて「生きる力」を付けていくことにあり、その成果はこれからの科目履修にどのように応用するか、自由な意見をこれまでに学んだコミュニケーション技法によって表現することで、自身の成長を測る。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生物学部社会福祉学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第1類科目 キ ー ・ コ ン ピ テ ン シ ー ゼ ミ ナ ー ル	英語 I	演習方式で行う。現代社会がかかえる諸問題について、メディア空間にあふれる情報を取捨選択し、さまざまな議論を整理した上で、論理的に考えみずからの意志を構築する能力を身につける。大学進学後の高等教育第一段階の英語科目として、本講座は、次の3つの能力の獲得を目的とする。(1)新聞、インターネット、データベース、重要文献といった各種のデータソースのありかを知り、信頼できる情報の取得手順を体系化する能力、(2)英文の多読とスキミング、プレビューの能力と、英語によって提供される情報を読み解くリテラシー、(3)現代の社会問題を議論する時に必要となる基本的語彙力。これら3つの能力によりアカデミックピックス(ACADEmiC PiCks)の基礎を修得する。	
	英語 II	演習方式で行う。グローバル社会で情報発信するためには、クリティカル・シンキング(論理的問題解決能力)と対話を通じたアーギュメント能力が不可欠である。本講座では、国際コミュニケーションにおいてアボリアとされるトピックを複数とりあつかい、議論をおこなうための基礎的発信力を育成する。ここでいう基礎的発信力にまつわる能力とは、(1)時事問題に関する英文を正確に読み取る能力、(2)英文を学ぶことを通じて身につく論理的な思考力、(3)運用可能な基本語彙力と英語表現力、を指し、これら3つの能力が、アカデミックリーディングの基礎を修得する。	
	英語 III	演習方式で行う。国際化社会において、個人のプレゼンスの源泉となるのは、アーギュメント能力である。すなわち、他人を説得しうる明確な理由を述べて相手を説得し、納得させる能力である。時に、論理的な反論にあいながらも適切に対処し、対話を完成させることは、人間が生きていく際に最も必要とされる能力のひとつである。本講座では、様々な現代社会の問題を英語で読み、英語で考え、英語で議論するための基礎力を身につける。とりあつかうトピックについて、履修者は自分のスタンスを明らかにし、主張の根拠を論理的に構築する。英語で自分の主張を発信すること、対話相手の主張を正確に理解することにより、アカデミックアーギュメントの基礎を修得する。	
	中国語 I	演習方式で行う。中国語の初学者を対象に、「読む、聞く、話す、書く」という語学の四技能をバランスよく学ぶ。Iでは発音の修得を第一の目標に掲げ、繰り返しの発音練習や聞き取りなどにより、正確な発音を学び、それを定着させる。また現在中国で使用されている漢字(簡体字)やその発音を表記するローマ字(ピンイン)も重要な学修項目である。簡単な挨拶などができることを目標とするが、それには中国人の風習や習慣を理解することが必要である。文化としての中国語を意識した基礎的な表現を修得する。	
	中国語 II	演習方式で行う。中国語の初学者を対象に、「読む、聞く、話す、書く」という語学の四技能をバランスよく学ぶ。Iで修得した発音を定着させるため、繰り返しの発音練習や聞き取りなどを行う。また、基礎的な文型を理解することが重要な学修項目となるが、そのためには日本語と中国語の発想の違いなどに気づくことが大切である。それはまた翻って日本の文化を見直すことにもなる。中国語で簡単な文章理解でき、日常会話ができることで、異文化を知ること目標とする。	
	中国語 III	演習方式で行う。中国語の基礎を学んだ者を対象に、「読む、聞く、話す、書く」という語学の四技能をバランスよく修得する。繰り返しの発音練習や聞き取りなどが重要である。これまでに学んだ基礎的な知識をより確かなものにしていくことが重要である。そのためには引き続き日本語と中国語の発想の違いなどに留意していくことが大切である。また、会話をスムーズに行うために必要な中国の習慣や風習などについても知識を深めていく。中国語の基礎的な知識と能力をバランスよく発揮できることを目標とする。	
	フランス語 I	演習方式で行う。フランス語の初学者を対象に、フランス語の基礎的な文法、語彙と発音を学修する。文法と語彙の授業は読む練習だけでなく、口頭でも練習する。読んで理解することが初めのステップだが、次の段階として、話す能力を身につけるために、口頭での練習に移る。授業で習った文法と語彙を使って簡単な会話を行う。最初は文字と発音の関係を重視する。フランス語の基本構造を理解し、簡単な表現ができることを目標とする。あわせてフランス文化への理解を深める。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生物学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第Ⅰ類科目	キー・コンピテンシー ゼミナール フランス語Ⅱ	演習方式で行う。日常用いられている簡単なフランス語表現を通して、フランス語の読解に必要な文法を修得する。発音の修得と動詞の活用の習熟を中心にフランス語を段階を追って学んでいきながら、フランス語と日本語の相違、フランス人と日本人のものの見方や捉え方、文化や社会の違いに着目し、異文化であるフランスとフランス語を理解すると同時に、日本と日本語をより深く理解することを目標とする。	
	フランス語Ⅲ	演習方式で行う。フランス語の基礎を学んだ者を対象に、これまでに学んだ基礎的な知識をより確かなものにしていくため、「生きたフランス語」を学ぶ。フランス語のセンスをつかむために会話と文法をバランスよく学んでいく。その題材として絵画や料理などフランス文化を用いる。フランス語文法の全体像をつかみ、発音の基本をおさえて簡単なフランス語会話ができることを目標とする。加えてフランス文化の様々な側面を理解する。	
第Ⅱ類科目	学部共通部門 社会共生論	講義形式で行う。共生社会の理念の理解と、その実現に向けた基本的知識を身につけることを目標とする。多様な人々がともに生活を営む現代社会では、「共生」が大きな課題となっている。人権の尊重は国際的な社会規範であるが、自分と異なる他者へのまなざしは、時として排除と結びつきやすく、共生社会の実現の大きな阻害要因となる。また、自然や地球など私たちの生活する環境への共生を考えることも、持続可能な社会の実現のためには不可欠な視座である。本講義では、現代に生きる私たちが経験する、労働、在日外国人、教育、観光、環境、福祉、宗教といった地域社会の発展・構築に欠かせない種のテーマにおいて、排除と包摂の問題を学ぶ。	
	基礎ゼミナールⅠ	講義形式で行う。「社会福祉とはなにか」について体系的に学ぶことを目標とする。思いやりや慈しみは大切だが、それだけでは生活困難を抱えている人々の生活は向上しない。家族のありかた、雇用、住宅、生活文化、政治経済の動向など様々な見地から、社会福祉を必要とする人々の生活上の問題を把握し、どのようにして問題は生み出されるのか、具体的な解決のための社会福祉の方策を考えるための視座を習得する。具体的な到達目標は、①社会福祉を体系的にとらえることができる、②社会福祉の制度やサービスを必要とする人々の生活実態がイメージできる、③生活支援の具体的な方法を考えることができる、である。	
	基礎部門 基礎ゼミナールⅡ	演習形式で行う。大正大学がある豊島区の区民ひろば等でのサービスラーニングを通して、地域の現状やコミュニティソーシャルワーク実践の意義を理解し、地域の一員として活動に参加することで基礎的な実践力を身につけることを目標とする。併せて、事前学習・フィールドワーク・事後学習を通じ、情報収集や課題設定、体験や考察を行い、報告資料の作成につなげる。具体的な到達目標は、(1)区民ひろばの目的及び機能や担当地域の社会資源について考えることができる、(2)コミュニティソーシャルワーカーの業務や役割について考えることができる、(3)教員や職員の指示のもと行動することができる、(4)積極的に質問し、自ら考えて行動することができる、(5)収集した資料やグループ学習を踏まえ、レジュメを作成することができる、(6)グループ討議や発表などにおいて、自分の学習成果や意見などを的確に述べるることができる、である。	
基礎部門 基礎ゼミナールⅡ	演習形式で行う。大正大学がある豊島区の区民ひろば等でのサービスラーニングを通して、地域の現状やコミュニティソーシャルワーク実践の意義を理解し、地域の一員として活動に参加することで、基礎的な実践力を身につけることを目標とする。併せて、事前学習・フィールドワーク・事後学習を通じ、情報収集や課題設定、体験や考察を行い、報告資料の作成につなげる。具体的な到達目標は、(1)区民ひろばの目的及び機能や担当地域の社会資源について考えることができる、(2)コミュニティソーシャルワーカーの業務や役割について考えることができる、(3)教員や職員の指示のもと行動することができる、(4)積極的に質問し、自ら考えて行動することができる、(5)区民ひろば利用者とは良好な関係を築くことができる、(6)収集した資料やグループ学習を踏まえ、レジュメを作成することができる、(7)グループ討議や発表などにおいて、自分の学習成果や意見などを的確に述べるることができる、である。※基礎ゼミナールⅠとⅡは連続して行われる。		

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会福祉入門	講義形式で行う。社会福祉の基礎として、専門職が持つべき「感性」について、映像や資料、当事者の話から学び、共感する力を磨くことを目標とする。同時履修する基礎ゼミナールⅠと関連付け、小グループでのディスカッションを通して、理解を深めていく。授業は講義形式とグループ形式にて行う。具体的な到達目標は、利用者のおかれた生活課題と心情を理解することができる、共感する力を身に付けている、発表やグループ討議などについて自分の学習成果や意見を的確に述べるすることができる、社会福祉の基礎知識を身に付けている、である。	
基礎部門	仏教社会福祉論	講義形式で行う。わが国の福祉思想に関する経緯を理解し、思想と実践の関連が理解を理解し、仏教福祉の今日的課題から市民福祉への視点の習得することを目指す。社会福祉および福祉実践に影響を与えて仏教社会福祉の思想と実践への考察をテーマに掲げている。近代から現代に至るわが国の福祉思想に影響を与えた仏教福祉思想の流れを整理しながら、仏教社会福祉実践の展開についての検証を試みる。さらには、市民社会の形成にかかわる仏教社会福祉の今日的課題について考察する。	
	ソーシャルワーク論Ⅰ	講義形式で行う。以下の5点を目標とする。 ①社会福祉士および精神保健福祉士の役割と意義、範囲について整理して述べるができる。 ②社会福祉士および精神保健福祉士としての実践基盤となる価値と相談援助の理念について説明できる。 ③社会福祉士および精神保健福祉士の固有の相談援助の概念について説明することができる。 ④社会福祉士および精神保健福祉士の倫理綱領について、説明することができる。 ⑤社会福祉士および精神保健福祉士の倫理的ディレンマについて、具体例をもとに説明することができる。 社会福祉士および精神保健福祉士の役割や意義を、法制度や具体的な実践から把握し、「人権尊重」「社会正義」「利用者主体」「尊厳保持」等をキーワードとして、相談援助の概念と範囲をソーシャルワークの定義を踏まえつつ理解する。	
第Ⅱ類科目	社会福祉基礎実践	演習形式で行う。社会福祉施設の機能について理解する枠組みが持てるようになること、利用者像を捉える枠組みが持てるようになること、社会福祉専門職の役割が説明できるようになることを目標とする。社会福祉施設とその利用者、またそこで働く専門職について学ぶ。グループ学習をおこなうことで、一人の視野では足りないところ、またはそれぞれの強み、弱みによる見えるものの異なりを補完し合い、より深い事前学習を可能とする。また、その協力し合うプロセス自体が、社会福祉現場で求められる協働の基礎となることを目的とする。	
	社会福祉史	講義形式で行う。社会福祉史に関する概要を理解することを目標とする。歴史を「学ぶ」とは、単なる年号や人名の暗記ではない。一つひとつの歴史的な事柄を全体の流れの中に位置づけながら、自身の現在の立脚点を確認し、そこからどれだけ未来を見据えることができるようになるかが、歴史の正しい「学び方」である。本講義では、日本における主に明治、大正及び昭和戦前期までの近代と呼ばれる時間軸の中で、社会福祉に関連する歴史を学び、それら「過去の蓄積」を現代社会にどのように活かしていくのかを、共に考えていきたい。	
	社会福祉原論Ⅱ	講義形式で行う。以下の3点を目標とする。 ①現代社会における福祉制度や政策の概要を説明できる。 ②福祉原理や理論および哲学の要点を説明できる。 ③福祉ニーズと資源に対応する相談援助ができる。 現代社会における福祉制度の意義や理念、福祉政策との関係について理解する。また福祉の原理をめぐる理論および哲学に関する理解を深めるとともに、福祉政策の構成要素（政府、市場、家族、個人の役割を含む）、福祉政策におけるニーズと資源、福祉政策の課題、福祉政策と関連政策との関係について学習する。さらに相談援助活動と福祉政策との関係についても学習する。	
専門部門			

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	社会保障論Ⅰ	講義形式で行う。社会保障制度の目的、基本的仕組みを理解することを目標とする。個人や家族の生涯において、貧困・低所得、病気、高齢、失業、業務災害などは、個人や家族の生活困窮・困難を引き起こす場合がある。社会保障制度は、その社会的対応策であり、“ゆりかごから墓場まで”、健康で文化的な最低限度の生活を守ることを目的としている。各制度の現代的課題や今後の方向性についても説明する。歴史や現状を理解するために、新聞記事や関連資料はほぼ毎回提示し、映像資料は数回視聴する。	
	社会保障論Ⅱ	講義形式で行う。社会保障制度の目的、基本的仕組みを理論的に述べることができるようになることを目標とする。個人や家族の生涯において、貧困・低所得、病気、高齢、失業、業務災害などは、個人や家族の生活困窮・困難を引き起こす場合がある。社会保障制度は、その社会的対応策であり、“ゆりかごから墓場まで”、健康で文化的な最低限度の生活を守ることを目的としている。各制度の現代的課題や今後の方向性について説明する。歴史や現状を理解するために、新聞記事や関連資料はほぼ毎回提示し、映像資料は数回視聴する。	
第Ⅱ類科目 専門部門	公的扶助論	講義形式で行う。生活保護制度の原理原則を学び、実際の運用における問題点を理解することにより、生活保護制度の本来の役割について説明することができるようになることを目標とする。我が国における公的扶助の代表的制度である生活保護制度の理念と内容、福祉事務所ケースワーク実践を踏まえて理解する。また、現在検討されている生活保護制度の改正と制度の目指す方向性を考える。その上で、社会保障制度における生活保護制度の役割と社会的意義について考える。	
	現代貧困論	講義形式で行う。現代社会における貧困の概念、定義、測定を理解し、具体的に説明することができる、日本の貧困の実態について理解し、具体的に説明することができるようになることを目標とする。本講義では、現代社会における貧困とは何かについて概説した上で、日本ではどのように個人や家族に貧困が降り掛かっているのかを、子ども、若者、女性、ひとり親、高齢者、野宿者に焦点をあてて、実態を明らかにする。また、それぞれに対する対策の現状と課題も取り上げる。さらに、歴史や現状を理解するために、新聞記事や関連資料はほぼ毎回提示し、映像資料は数回視聴する。	
	ソーシャルワーク論Ⅱ	講義形式で行う。以下の8点を目標とする。 ①相談援助の基盤となる援助関係の重要性とその形成方法について説明することができる ②ソーシャルワークの源流について説明することができる ③相談援助に必要な面接技術について応用することができる ④相談援助に必要な記録技術について応用することができる ⑤個人を対象とした相談援助の概念について説明することができる ⑥個人を対象とした相談援助の展開過程について具体的に述べる ⑦集団を対象とした相談援助の概念について説明することができる ⑧集団を対象とした相談援助の展開過程について具体的に述べる 相談援助の基盤となる援助関係について理解した上で、主に、個人と集団に焦点を当てた相談援助の概念と展開過程について、相談援助の範囲に留意しつつ検討する。	
	ソーシャルワーク論Ⅲ	講義形式で行う。ジェネラリストソーシャルワークについて説明できるようにする。ソーシャルワーク実習ⅠⅡ、ソーシャルワーク演習ⅠⅡとの関連の中で、ソーシャルワーク理論を自分の経験を用いて具体的に説明できるようになる。ソーシャルワークの発展過程について説明できるようになることを目標とする。以下の3点を講義する。 ①ジェネラリストソーシャルワークについて説明する。 ②ソーシャルワーク実習ⅠⅡ、およびソーシャルワーク演習ⅠⅡと関連しながら、ソーシャルワーク理論を具体的場面と関連づけて説明する。 ③ソーシャルワークの発展過程について説明する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	ソーシャルワーク論Ⅳ	講義形式で行う。ケースマネジメント（ケアマネジメント）の理論と方法、およびスーパービジョン、コンサルテーションの定義と機能について理解することを目標とする。支援者としてケースマネジメント（ケアマネジメント）を正しく理解し、ケアプランを作成し支援できるようになるために、ケースマネジメントの基礎理論、技能を正しく身に付ける。また、福祉現場でより良い支援者として成長するために必要な、スーパービジョンやコンサルテーションについても理解する。講義形式で主に教員が講義し、双方向型授業を重視し、ディスカッションも取り入れる。	
	ソーシャルワーク論Ⅴ	講義形式で行う。ジェネラリストソーシャルワークの枠組みに基づき、直接的介入だけでなく、間接的介入に重点を置いて学ぶことを目標とする。グループ活用の支援・コーディネートとネットワーク・ファンリテーション・社会資源活用と調整、開発・ケースカンファレンス・チームアプローチ等の、集団・組織・地域支援のための価値・知識・技術について考える。さらに、誰もがその人らしく生活できる地域づくりに貢献する、ソーシャルワーカーとしての基礎力を育成する。	
	ソーシャルワーク論Ⅵ	講義形式で行う。以下の2点を目標とする。 ①ソーシャルワークの各種アプローチより、事例への多様な支援視点を考えることができる。 ②地域共生社会実現に向けて社会福祉士に期待される役割に気づくことができる。 ソーシャルワーク実践モデルやアプローチを事例に基づき考えることにより、専門職としての視点や方法を振り返る。そして、社会がソーシャルワーカーに求める役割に近づけるよう、これまでの学習のまとめをする。講義、小グループによるディスカッション、発表を行う。	
第Ⅱ類科目 専門部門	社会福祉調査論	講義形式で行う。問題設定、調査方法の選択、報告に必要な知識を養い、自ら社会調査を適切に実施できる力をつけることを目標とする。社会福祉調査とは、社会の持つ具体的な福祉の問題を明確にし、問題解決の道を探るための情報を得るために行うものである。通常、社会を構成するものすべてを調べることはできないので、その一部を選んで、調査し、その結果から全体を推し量ることになる。また、調査を行うためには、解明すべき具体的な問題（リサーチクエスチョン）を設定することが前提になる。そのうえで、その問題を明らかにできるような調査方法を選ぶ必要がある。なお、現実の社会福祉調査を行うためには、一定の倫理が必要である。しなければならないこと、してはならないことを自分で判断できるようにすることも目標である。量的な調査の理解のために必要な統計の知識についても理解できるようにする。	
	福祉行財政・福祉計画論	講義形式で行う。以下の3点を目標とする。 ①社会福祉における国家・自治体の責任と役割を理解できる ②社会福祉の専門職あるいは福祉系学部卒業生として地域社会で生じた福祉ニーズを満たすために要請すべき行政組織、また連携を図るべき他職種の専門職を選択することができる ③当事者参加や住民参加の福祉計画のあり方を説明できる 社会福祉における国家・自治体の責任と役割、福祉行政の組織・専門職の役割、福祉財政の意義と行政との関係、財源構造などの内容とその課題を扱う。また、国家・自治体の福祉政策、住民参加型の地域福祉推進のために策定され、福祉需要の広範化を反映して複雑化する各種福祉計画について、その意義と目的、歴史的展開過程や法的規定、そしてその実態とその課題について説明する。	
	福祉経営論	講義形式で行う。福祉サービスの組織と経営の考え方を理解することを目標とする。今日の多様化・複合化した福祉課題に対してソーシャルワーク実践を行うためには、福祉サービスを「事業」として持続可能とすることが求められる。そしてこの持続可能性の基盤をなすのが経営である。具体的には、福祉経営における特殊性（経営に対する制度的な規制や財源、提供サービスの公共性・公益性・非営利性）と普遍性（企業・福祉を問わず組織運営一般に適用可能な経営管理の考え方）の2つの側面を学び、持続可能なソーシャルワーク実践を支える経営の理論・実際の両面に関する知識の獲得を目指す。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共同学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	地域福祉論Ⅰ	講義形式で行う。以下の3点を目標とする。 ①地域社会で発生している生活問題について具体的に述べるができる ②地域社会で取り組まれている活動や実践に参加することができる ③地域の社会資源や地域の特性について述べるができる 地域社会で発生している生活問題と地域福祉がテーマである。地域社会では、今どのような問題が起きているのかを具体的に知る。そして、その地域社会の問題を解決するためには、自治体・社会福祉協議会・町内会や自治会がどのような取り組みをしているのか具体的に知る。	
	地域福祉論Ⅱ	講義形式で行う。以下の3点を目標とする。 ①地域福祉の発展過程を理解する。 ②地域福祉の推進方法（社会資源活用・調整・開発、地域福祉計画）について概要をつかむ。 ③地域福祉の概念と専門用語を理解する。 地域福祉の考え方や地域福祉推進の視点を学ぶことに加え、地域福祉の現在までの発展過程とその蓄積に基づき、21世紀の人と社会のニーズに対応する、地方自治体をレベルでの地域福祉の推進方法と展開システムを学ぶ。	
	コミュニティーソーシャルワーク論	講義形式で行う。CSWの基本的な概要を理解することを目標とする。CSWは、社会福祉法4条の「地域福祉推進」に向けた実践方法のひとつである。CSWは、個別ニーズの集積より地域共通課題を発見し、その地域共通課題への地域支援事業を計画する。さらにCSWは、個別と地域の課題対応を図る実践の循環より、サービス開発や改善、及び地域福祉計画等を活用した地域サービスシステムの形成をめざす。本講義では、CSWの実践基盤となる理論と方法をふまえ、ワークシートによる具体的な支援過程と、各地のCSW実践の取り組みを学ぶ。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生学部社会福祉学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第II類科目 専門部門	ユニバーサルデザイン論	講義形式で行う。ユニバーサルデザインを構成する要素を把握し、実際の生活の中で、ユニバーサルデザインが当事者等にどのように役立っているかを理解することを目標とする。授業では、ユニバーサルデザインの原則について学ぶ、ユニバーサルデザイン化されたまちを考えてみる、ユニバーサルデザインに関連する基本的な法制度について学ぶの3段階構成からなる。また、大学を中心とした果鴨の町がどれほどユニバーサルデザイン化されているかをみんなで分担しながら調べ、より良いと思われる町にするためのアイデアを出し合って、まちづくりを考えてみる。	
	高齢者福祉論	講義形式で行う。以下3点において、高齢者福祉の基本的な枠組みについて理解することを目標とする。 ①高齢社会の課題について説明することができる。 ②高齢者の生活実態について説明することができる。 ③高齢者福祉制度の発展過程と最新の制度について述べるができる。高齢者福祉を学ぶにあたって、まず、高齢者がどのような生活問題を抱えているのか概説する。その上で、現在の高齢者福祉制度の発展過程について説明を行う。	
	介護福祉論	講義形式で行う。社会福祉を学ぶ学生が将来実践の現場において介護の関係者と連携するときに必要となる基本的な介護に関する知識について学ぶことを目標とする。介護の概念、対象、理念などを整理し、介護をより具体的にイメージできるようにする。介護の対象者を理解した上でどのような介護過程が展開されるのかを学ぶ。介護技法の概要について学び、介護の概念や対象及びその理念等について理解し、介護過程における介護の技法や介護予防の基本的考え方について理解し、終末期ケアや認知症ケアのあり方（人間観や倫理を含む）について理解できることが目標である。	
	障害者福祉論	講義形式で行う。障害者の定義、障害の概念、「障害者自立支援法」等の法制度および施策、ライフステージに沿った療育・教育・雇用、「障害者ケアマネジメント」「多職種連携とネットワーク」等の支援活動を理解することを目標とする。「ノーマリゼーション」「自己決定」「権利擁護」「地域生活」等をキーワードに、具体的な支援のあり方をゲストスピーカーの講義も取り入れながら考える。本授業を通じ、障害当事者の生活と人権、支援のあり方を考える。講義形式で、主に教員が講義する。双方向型授業を重視し、ディスカッションも取り入れる。	
	児童福祉論	講義形式で行う。少子高齢社会における子どもの成長・発達と生活実態及び社会的背景について理解することを目標とする。児童福祉の歴史的展開、ニーズの把握と援助方法について取り上げる。加えて児童福祉法、子どもの権利条約等の理念をおさえ、現時点における児童福祉施策上の課題と法に規定された児童福祉機関、児童福祉施設および里親の現状とその援助の実際について学習する。さらに児童福祉分野で働く専門職の役割を学び、児童家庭福祉の推進に向けて検討する。主に講義形式にて授業を展開する。	
	スクールソーシャルワーク論	講義形式で行う。以下の2点を目標とする。 ①スクールソーシャルワーカーの役割を述べるができる。 ②スクールソーシャルワークの展開過程を具体的にイメージできる。 スクールソーシャルワークは、教育現場で展開するソーシャルワークである。「子どもの権利」「連携」などをキーワードとして、スクールソーシャルワークの展開過程を事例を交えながら理解し、スクールソーシャルワークの機能と役割を理解する。グループワークや意見交換を交えながら行う。	
	就労支援論	講義形式で行う。就労支援に関する概要を理解することを目標とする。現在我が国では、産業構造の変化による失業者と貧困問題がクローズアップされている。また、障害者をはじめ、高齢者、母子家庭、フリーターなどの経済的自立も喫緊の課題となっている。このような状況の中、当事者への相談支援や就労サポートシステムの構築など、雇用と福祉の連携という視点からの社会福祉士の役割が大きくなっている。本講義では、相談支援活動において必要な各種の就労支援制度や関係機関について理解し、就労支援の具体的な方法を講義する。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生物学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	司法福祉論	講義形式で行う。更生保護制度に関する概要を理解することを目標とする。更生保護制度とは、犯罪をした人や非行少年等の再犯・再非行を防ぎ、その社会復帰を支援することにより、社会の保護と個人及び公共の福祉の増進を図ることを目的とする。その中身は、保護観察、仮釈放、生活環境の調整、更生緊急保護、犯罪予防活動等、多岐にわたる。本授業では、更生保護制度の概要、更生保護制度の担い手、更生保護制度における関係機関・団体、医療観察制度等について学び、官民の協力と司法と福祉の連携が強く求められている現在の更生保護制度の全容を学ぶ。	
第II類科目 専門部門	福祉法学	講義形式で行う。憲法（特に基本的人権）、成年後見制度、その他社会福祉に関わりの深い法制度や法学の基礎について理解し、実際の事例に直面したときに解決策を自ら考えられるようになることを目標とする。学生との対話を重視した形式で実施する。それぞれの講義内容に沿った質問を講師から投げかけ、学生に回答していただく中で、制度の基本的な理解を得るとともに議論の土台となる表現力を獲得することを目指す。回答において正解を述べることは求められないが、事前の予習を活かしてなんらかの回答を行うことが求められる。また、講義の合間には、各界で活躍している実務家を招き、対談等を取り入れて講義に変化をつける。概ね、法学基礎知識の修得を1、実務的法学の習得を2の割合として授業を進行させる。	
	心理学	講義形式で行う。心理学の基礎知識を身につけ、心理学的視点から社会事象を説明することができるようになることを目標とする。社会福祉的援助を行う人のための心理学入門である。社会福祉の領域では、近年ますます対象者の心理面が注目されている。本講義では、社会福祉の実践のための心理学知識の基礎を得ることと、選択資格科目のひとつである心理学受験に備えることを目指して、心理学の全領域を概説する。社会福祉士養成課程の指定科目である。	
	社会学	講義形式で行う。社会学とは何か、理論と方法を理解すること、加えてその知見から現実の問題の構造を見通し、「生活」の在り方を包括的に捉えなおし、現代社会について論じられるようになることを目標とする。社会学とは、人と社会の関係性を問う学問である。本講義では、方法論や具体的事例を紹介しながら、なるべくわかりやすく基礎概念を説明していく。現実の背後にある社会構造や社会変動についての理解を深め、現代社会の捉え方を学ぶ。最終的には、受講生一人ひとりが、社会学的知見を「使える知識」として身につけ、自身の価値観や行動様式、社会的現実について論じられるようになることが求められる。	
	精神保健福祉論 I	講義形式で行う。以下の6点を目標とする。 ①わが国における精神保健および精神障害者福祉の歴史的な展開過程を説明できる。 ②WHOの障害概念、障害者の権利条約等国際的な動向を踏まえ、我が国の現状を分析し課題を整理できる。 ③最近の精神保健福祉施策および障害者総合支援法の内容を説明できる。 ④最近の精神保健福祉施策および精神保健福祉法の内容を説明できる。 ⑤最近の精神保健福祉施策および関連する社会保障制度の内容を説明できる。 ⑥最近の精神保健福祉課題に対応した精神保健福祉士の役割を理解している。 精神保健と社会福祉との相関を踏まえた上で、障害者福祉の理念と法・制度ないし施策に関する概要の理解をすすめる。主に、精神障害者福祉の現状と課題を学ぶために、精神障害者の人権、精神保健福祉士の意義と役割、精神保健福祉法と関連施策の理解を深める。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生物学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	精神保健福祉論Ⅱ	講義形式で行う。以下の4点を目標とする。 ①精神保健福祉法や関連する法制度の展開過程を説明できる。 ②精神障害者の置かれている現状を歴史的背景から理解し、今後の課題について学ぶことができる。 ③精神保健福祉法や関連する法制度及びサービスのあり方について理解を深めることができる。 ④精神保健福祉士の意義と役割を学ぶことができる。 授業は、次の各点を講義する。 ①精神保健福祉に関する制度とサービスについて考察する。 ②日本における精神保健福祉分野の法制度及びサービス体系の成り立ちから現在までの展開課程を把握する。 ③精神障害者の置かれている現状を歴史的背景から理解し、今後の課題を把握する。 ④精神保健福祉法や関連する法制度及びサービスのあり方について理解を深める。⑤精神保健福祉士の意義と役割を理解する。	
	精神保健福祉論Ⅲ	講義形式で行う。精神障害者の生活の実態・生活と人権・居住支援・就労支援・生活支援システム全般・市町村やその他の行政機関における相談援助について学び、精神障害者の概念を説明できるようになることを目標とする。精神障害者の概念を理解し、生活支援の意義と特徴について学ぶ。具体的には、精神障害者の生活支援システム全般、精神障害者の生活支援の意義と特徴、精神障害者の生活支援システム、居宅支援と就労支援に関する制度、施策、相談援助活動について理解を深める。	
第Ⅱ類科目 専門部門	精神保健福祉援助技術総論	講義形式で行う。以下の3点を目標とする。 ①精神保健福祉士の専門性を学習することができる。 ②相談援助における権利擁護の概念を理解し、専門職としてかかわることの重要性を把握することができる。 ③精神保健福祉分野における相談援助の意義を見出し、総合的・包括的な援助と多職種連携について学ぶことができる。 精神保健福祉分野における総合的かつ包括的な相談援助の理念と方法に関する知識と技術と、医療と協働・連携する相談援助の方法に関する知識と技術を習得することを目指す。	
	精神保健福祉援助技術各論	講義形式で行う。以下の3点を目標とする。 ①精神障害者の地域生活の実態とこれらを取り巻く社会情勢及び地域相談援助における基本的な考え方について理解する。 ②地域リハビリテーションの構成と社会資源の活用及びケアマネジメント、コミュニティワークの実践について理解する。 ③地域生活を支援する保健・医療・福祉等の包括的な支援の意義と展開について理解する。 授業では次の各点について講義する。 ①精神障害者を対象とした相談援助技術（個別援助、集団援助の過程と、相談援助に係る関連援助や精神障害者と家族の調整及び家族支援を含む）の展開について学ぶ。 ②精神障害者の地域移行支援及び医療機関と地域の連携に関する基本的な考え方と支援体制の実践について学ぶ。	
	精神科リハビリテーション学	講義形式で行う。精神科リハビリテーション学の概念について理解することを目標とする。国家資格である精神保健福祉士が誕生し、早20年が経過した。この間、2010年には実践力を高める目的で精神保健福祉士法が改正され、これまでの「精神科リハビリテーション学」は、「精神保健福祉の理論と相談援助の展開」という新科目に統合された。そこで、本講義では、従来の精神科リハビリテーション学を狭い技術の枠ではなく、理念や基本原則を含み精神保健福祉士として共有すべき理論と相談援助の全体像を視野に入れて解題していく。教室での講義形式の座学を基本とする。	
	精神保健学	講義形式で行う。精神保健学の概念について理解することを目標とする。本科目は精神保健福祉士国家資格取得のためのrequirement科目となっている。精神保健福祉士国家資格を取得しようとする学生のために開講されるものである。授業内容は国家試験の必要事項に沿って展開されるが、受験対策という視点のみならず、精神保健とはなにであるか、そしてメンタルヘルスの維持において大切なこと、維持のために必要なことが授業の終わりには十分に理解されるように構成する。双方向型授業を重視し、主体的に考えを深めるためにも、ディスカッションも取り入れて行う。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第II類 専門部	精神疾患とその治療	講義形式で行う。以下の3点を目標とする。 ①精神疾患総論：代表的な精神疾患について、その成因、症状、診断法、治療法、経過、本人や家族への支援について理解する。 ②向精神薬をはじめとする薬剤による心身の変化について理解する。 ③医療機関の役割と機能、関係機関・職種との連携について理解する。 代表的な精神疾患について、成因、症状、診断法、治療法、経過、本人や家族への支援、及び精神科病院等における専門治療の内容及び特性について概説をする。精神保健福祉士が、精神科チーム医療の一員として関わる際に担うべき役割と精神医療・福祉との連携の重要性と精神保健福祉士がその際に担うべき役割について学ぶ。	
	医学概論	講義形式で行う。社会福祉を学ぶ学生が実践の現場において保健・医療の関係者と連携をとる際に必要とされる基本的な医学知識について学ぶことを目標とする。ヒトについて学ぶ上で基本となる人体の構造や機能、様々な疾患、障害などについて社会福祉の専門職にとって不可欠な基礎的知識を習得するというだけでなく、一般職につく者、家庭で生活する者にとっても教養として身につけてほしい知識について学ぶ科目である。人体の構造と機能、疾病の概要、障害の概要について、人の成長・発達や日常生活との関係をふまえて理解でき、国際機能分類（ICF）の基本的な考え方、健康に必要な知識を身につけること及びリハビリテーションの概要について理解することを目指す。	
	医療福祉論	講義形式で行う。以下の4点を目標とする。 ①「現在の日本における医療の供給体制について説明できる。 ②医療に携わる医療従事者の資格と役割について説明できる。 ③社会保障の一部としての保健医療サービスのしくみ（主に診療報酬制度）を説明できる。 ④多職種連携の実際について説明できる。 社会福祉士国家試験に必要な知識をテキストに沿って講義する。 主な内容は以下の項目である。 ①現在の日本における医療の供給体制について説明する。 ②医療に携わる医療従事者の資格と役割について説明する。 ③社会保障の一部としての保健医療サービスのしくみ（主に診療報酬制度）を説明する。 ④多職種連携の実際について説明する。	
	医療ソーシャルワーク論	講義形式で行う。医療という特殊な環境で行われるソーシャルワークについて理解することを目標とする。内容は大きく以下の3つ。 ①疾病と生活問題の関連 ②医療のパターナリズムと、自己決定、患者の権利、それに関わる医療ソーシャルワーク ③各領域（急性期、回復期、慢性期、終末期など）に特化した医療ソーシャルワークの具体例 授業は、基本的な知識を講義した後、予習で考えてきたことをグループディスカッションを行うことで、知識と経験の循環を行い理解を深める。	
	エンド・オブ・ライフケア論	講義形式で行う。本講義ではターミナルケアを、ひとの死といかに関わるかを主たる問題意識として、その文化的な展開を総合的に学ぶことを目標とする。単にターミナルケアを「死の直前のケア」としてとらえるだけではなく、死の看取りにどのように日本人が関わってきたか、なぜターミナルケアが必要になってきたのか、WHOの提唱する「人間のいたみ」とは何か等、正確なターミナルケアや緩和ケア、ホスピス、グリーフケア等の知識と実際に学ぶことができる。さらには仏教がどのように死の看取りにかかわってきたのか、現在ではどのような状況なのか、学ぶことができる。自らの死生観を学ぶのにも有効な時間となる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生学部社会福祉学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
行 目	社会福祉特講Ⅰ	講義形式で行う。1年間を通じ、国家資格で要求される専門知識の習得に向けて、土台となる基礎学力を身につけることを目標とする。実力を備えた社会福祉士になるための、最初の段階に位置づけられる講義である。社会福祉士として必要な知識のうち、それまでに学んできた基礎的な事項を学習する。ソーシャルワーク、社会福祉制度・政策の基本概念を学ぶとともに、実習に向けて、児童・障害・高齢の各領域について重点的に学習を行う。毎時間、前回の授業範囲の復習の後に、もっとも重要な事項について講義を行い、必要に応じてペア学習、グループワーク、演習によって理解を深め、知識の定着を図る。講義の終わりに、講義内容の確認テストを行う。	
	社会福祉特講Ⅱ	講義形式で行う。1年間を通して、社会福祉士として必要な全科目について、基礎的な事項を学習することを目標とする。本講義は、実力を備えた社会福祉士になるための第二段階に位置づけられる。春学期には、社会福祉士試験と精神保健福祉士試験の共通科目について学習し、秋学期には社会福祉士試験の専門科目について学習する。授業では、まず、前回の授業範囲の復習テストを行う。その後、各自の予習を前提に講義と演習を行い、必要に応じてペア学習、グループ学習を行って理解を深め、知識の定着を図る。授業の最後に講義内容の確認テストを行う。	
	社会福祉特講Ⅲ	講義形式で行う。社会福祉士として必要な全科目について、重要な事項を学習することを目標とする。本講義は、実力を備えた社会福祉士になるための、本学における仕上げの段階に位置づけられる。春学期には、社会福祉士国家試験の全科目について、過去の社会福祉士国家試験の問題などを教材として学習する。講義も行うが、学生の主体的学習を軸とし、グループ学習も実施する。秋学期には、同じく全科目について、グループ学習方法を中心とし、様々な教材を活用して、近年の重要な制度改正を含めた重要な項目について学習する。授業では、原則として、まず、前回の授業範囲の復習テストを行い、当該授業の範囲について事前学習を前提とした講義・演習を行う。授業の終わりには、今回の授業で学習した内容について確認テストを行う。	
	ソーシャルワーク演習Ⅰ	演習形式で行う。以下の3点を目標とする。 ①他者に対して自己を表現すること、他者の表現に対して適切な応答をすることができるようになる。 ②他者とコミュニケーションを通して自己理解を深めることができるようになる。 ③演習と通じて、自己の社会福祉士としての適性を確認することができる。 自己及び他者理解を促進するために、「自己紹介と他己紹介」「当事者の手記を読む」「実践事例を読む」「自分史の作成」等を、個別および小グループで行う。同時履修するソーシャルワーク実習Ⅰとの関連を理解する。	
	ソーシャルワーク演習Ⅱ	演習形式で行う。以下の2点を目標とする。 ①専門職としての発信および受信、双方向のコミュニケーションをすることができる。 ②演習を通して、自己の社会福祉士としての適性を確認することができる。 ソーシャルワークの基礎技術（ソーシャルワーク（ケースワーク、グループワーク）、コミュニケーション技法、インテーク、アセスメント、プランニング）を、ロールプレイ等を用いて実践的に学ぶ。実践力のある社会福祉士として必要となる基礎的な専門技術を習得することが目的となる。	

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生物学部社会福祉学科)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第II類 科目	実習・ 演習部門	ソーシャルワーク演習Ⅲ	<p>演習形式で行う。以下の6点を目標とする。</p> <p>①権利擁護に関する制度施策について説明することができる                      ②支援計画作成に関するプロセスや必要となる技術について具体的に述べることができる                      ③インテークやアセスメント、モニタリング、アフターケアに必要な面接技術を応用することができる                      ④プランニングに必要な記録技術を応用することができる                      ⑤会議運営に必要な技術を応用することができる                      ⑥グループ討議やロールプレイにおいて、自分の学習成果や意見などを的確に述べるができる。</p> <p>社会福祉士として相談援助に必要な知識や技術を、ロールプレイをおこない、体験として自らの技能、技術、知識として習得する。事例は、社会的排除、虐待、家庭内暴力、低所得者、ホームレス、権利擁護等の事例や、実習で体験した事例などを用いる。授業は、個別指導とグループワークを組み合わせながら演習形式で行う。</p>
		ソーシャルワーク演習Ⅳ	<p>演習形式で行う。以下の6点を目標とする。</p> <p>①社会的排除、虐待、家庭内暴力、低所得者、ホームレス支援に関する制度施策について説明することができる                      ②支援計画作成に関するプロセスや必要となる技術について具体的に述べることができる                      ③インテークやアセスメント、モニタリング、アフターケアに必要な面接技術を応用することができる                      ④プランニングに必要な記録技術を応用することができる                      ⑤会議運営に必要な技術を応用することができる                      ⑥グループ討議やロールプレイにおいて、自分の学習成果や意見などを的確に述べることができる。</p> <p>社会福祉士として相談援助に必要な知識や技術を、ロールプレイをおこない、体験として自らの技能、技術、知識として習得する。事例は、社会的排除、虐待、家庭内暴力、低所得者、ホームレス、権利擁護等の事例や、実習で体験した事例などを用いる。授業は、個別指導とグループワークを組み合わせながら演習形式で行う。</p>
		ソーシャルワーク演習Ⅴ	<p>演習形式で行う。「利用者主体」、「地域包括支援」、「ソーシャルインクルージョン」の概念を正しく理解することを目標とする。その概念を、具体的な場面に落とし込み、ロールプレイやプランニングが出来るようになる。具体的に落とし込んだものをまとめたうえで発表し、クラス内で共有するグループワーク形式にて展開する。ソーシャルワークの核概念である「利用者主体」を理解する（ミクロレベル）ために、実習のなかで経験した「利用者主体」に関わる場面について発表し、より「利用者主体」を実現するための方法を検討する。また、「地域包括支援」を理解する（メゾレベル）ために、地域アセスメントや地域福祉計画のつながりを学ぶ。さらに、「ソーシャルインクルージョン」を実現するためのソーシャルアクションを理解する（マクロレベル）ために、避難所運営をソーシャルアクションの実例から学ぶ。</p>
		ソーシャルワーク演習Ⅵ	<p>演習形式で行う。社会福祉士課程の上位科目として開講。ソーシャルワーク実習Ⅰ及びソーシャルワーク実習指導Ⅱを履修済であることが必須。スクールソーシャルワーク（SSW）、コミュニティソーシャルワーク（CSW）、医療ソーシャルワーク（MSW）実践について、ミクロ、メゾ、マクロの各レベルにおけるアセスメント、プランニング、支援の実施について、演習を通して理解を深めることを目標とする。加えて、学校内での協働に役立つ、実践記録の創意工夫についても学ぶ。ソーシャルワーク実習Ⅲと同時履修にて学習を展開していく。</p>
		ソーシャルワーク実習指導Ⅰ	<p>演習形式で行う。社会福祉士の役割と意義について理解したうえで、相談援助に係る専門職として必要な知識や技術を、ソーシャルワーク実習の具体的な場面のなかで体得するための準備性を高めることを目標とする。社会福祉専門職に求められる、価値・倫理の学習と、社会福祉施設等の機能、利用者像、その根拠となる法律等を関連して理解することで、専門職実践のための実習に臨む態度や姿勢を具体的に示すことができるようになる。また、実習事務の手続きや実習ノートの管理、書き方、オリエンテーションにおける留意点等、実習に伴う注意事項について伝達する機会とする。</p>

授 業 科 目 の 概 要			
(社会共生学部社会福祉学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
第II類科目 実習・演習部門	ソーシャルワーク実習指導Ⅱ	演習形式で行う。4週間のソーシャルワーク実習Ⅰとの同時履修。社会福祉施設等での実習に臨む態度や姿勢を常に確認するとともに、実習事務の手続きや実習ノートの書き方等、実習に伴う注意事項について伝達する機会とする。また事前学習、配属実習、事後学習の各段階で、社会福祉士の役割と倫理及び相談援助に係る専門職として必要な知識や技術が理解できるよう指導を行う。さらに、ゲストスピーカーによるワークショップを行い、実習を通して学んだ内容の理解をより深める。	
	ソーシャルワーク実習Ⅰ	実習形式で行う。社会福祉施設等での実習に臨む態度や姿勢を常に確認するとともに、実習を通して相談援助に関する知識と技術について具体的かつ実践的に学ぶことを目標とする。また、事前学習、実習、事後学習の各段階で社会福祉士の役割と意義を理解するとともに、社会福祉士に求められる資質、技能、倫理や、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する。さらに、関連分野の専門職との連携やその具体的内容についても実践的に理解する。実習先の実習指導者による個別指導及び集団指導。学内での講義及びグループワークにておこなう。	
	ソーシャルワーク実習Ⅱ	実習形式で行う。社会福祉士の役割と意義について理解し、相談援助に係る専門職として必要な知識や技術、倫理を様々な実践モデルの学びや事例分析、実習を通して会得することを目標とする。学校等でのスクールソーシャルワーク実習に臨む態度や姿勢を常に確認するとともに、学校や学校組織を体験的に理解する。そして、社会福祉士としての倫理、知識、技術を、教育現場で生かすことができる総合的対応能力を養う。社会福祉士の役割と意義、社会福祉として求められる資質、倫理等について理解し、社会福祉施設等での実習を的確に実施するために、事前・事後各段階での学習課題を確実に達成できている、相談援助に係る専門職として必要な知識や技術について具体的かつ実際に理解でき、それらが身につけていることが目標である。	
	精神保健福祉援助演習Ⅰ	演習形式で行う。以下の2点を目標とする。 ①精神保健福祉士のスペシフィックな専門知識および技術などが実践できる能力を身につける。 ②具体的な相談援助やリハビリテーション活動を理論化して体系立てられる能力を修得する。 ソーシャルワーカーである精神保健福祉士として、よりスペシフィックな専門性を習得するために、そこで活用される専門知識および技術などを実践できる能力を身につけるためのスーパーバージョンを行う。また、具体的な相談援助やリハビリテーション活動を理論化して体系立てられる能力をも修得するための実技指導を展開する。	
	精神保健福祉援助演習Ⅱ	演習形式で行う。精神保健福祉士としての知識及び技術などを実践できる能力を身につけること、具体的な相談援助やリハビリテーション活動を理解して体系化できる能力を習得することを目標とする。精神保健福祉士の援助実技を通じ、より高い専門性を習得することをテーマとしている。ソーシャルワーカーである精神保健福祉士として、よりスペシフィックな専門性を習得するために、そこで活用される専門知識および技術などを実践できる能力を身につけるためのスーパーバージョンを行う。また、具体的な相談援助やリハビリテーション活動を理論化して体系立てられる能力をも修得するための実技指導を展開する。	
	精神保健福祉援助実習指導Ⅰ	演習形式で行う。精神保健福祉士の実習に向けての準備学習及び事前学習をするための科目。ソーシャルワーカーである精神保健福祉士として、よりスペシフィックな専門性を習得するために精神保健福祉機関における実習体験を通じて、そこで活用される専門知識および技術などを実践できる能力を身につけることを目標としてスーパーバージョンを行う。また、具体的な相談援助やリハビリテーション活動を理論化して体系立てられる能力をも修得するための実習指導を展開する。演習形式で、学生に順次発表・回答させる。双方向型授業を重視し、ディスカッションも取り入れる。	

授 業 科 目 の 概 要				
(社会共生物学部社会福祉学科)				
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
第II類科目	実習・演習部門	精神保健福祉援助実習指導Ⅱ	演習形式で行う。ソーシャルワーカーである精神保健福祉士として、よりスペシフィックな専門性を習得するために精神保健福祉機関における実習体験を通じて、そこで活用される専門知識および技術などを実践できる能力を身につけることを目標としてスーパービジョンを行う。また、具体的な相談援助やリハビリテーション活動を理論化して体系立てられる能力をも修得するための実習指導を展開する。精神保健福祉士の実習体験を通じ、より高い専門性を修得する。演習形式で、学生に順次発表・回答させる。双方向型授業を重視し、ディスカッションも取り入れる。	
		精神保健福祉援助実習指導Ⅲ	演習形式で行う。ソーシャルワーカーである精神保健福祉士として、よりスペシフィックな専門性を習得するために精神保健福祉機関における実習体験を通じて、そこで活用される専門知識および技術などを実践できる能力を身につけることを目標としてスーパービジョンを行う。また、具体的な相談援助やリハビリテーション活動を理論化して体系立てられる能力をも修得するための実習指導を展開する。精神保健福祉士の実習体験を通じ、より高い専門性を修得する。演習形式で、学生に順次発表・回答させる。双方向型授業を重視し、ディスカッションも取り入れる。	
		精神保健福祉援助実習Ⅰ	実習形式で行う。精神保健福祉士のスペシフィックなより高い専門知識および技術などが実践できる技能を身につけること、具体的な相談援助やリハビリテーション活動を理論化して体系立てられる能力をもつことを目標とする。ソーシャルワーカーである精神保健福祉士として、よりスペシフィックな専門性を習得するために精神保健福祉機関における実習体験を通じて、そこで活用される専門知識および技術などを実践できる能力を身につけるためのスーパービジョンを行う。また、具体的な相談援助やリハビリテーション活動を理論化して体系立てられる能力をも修得するための実習指導を展開する。	
		精神保健福祉援助実習Ⅱ	実習形式で行う。精神保健福祉士のスペシフィックなより高い専門知識および技術などが実践できる技能を身につけること、具体的な相談援助やリハビリテーション活動を理論化して体系立てられる能力をもつことを目標とする。ソーシャルワーカーである精神保健福祉士として、よりスペシフィックな専門性を習得するために精神保健福祉機関における実習体験を通じて、そこで活用される専門知識および技術などを実践できる能力を身につけるためのスーパービジョンを行う。また、具体的な相談援助やリハビリテーション活動を理論化して体系立てられる能力をも修得するための実習指導を展開する。	
応用部門	プロジェクト研究Ⅰ	演習形式で行う。これまでの科目履修の成果をふまえ、最終学年の卒業論文・研究の事前学習を促進するために、自己の社会福祉実践に関する問題関心を明確化することを目標とする。教員の指導を受けながら、自分が関心のある課題に関する文献・資料・実践記録等を収集し、それを教材にした演習を行う。卒業後、社会福祉および精神保健福祉領域で働くための実践能力と論理性を身につけることを目指す。また、社会福祉実践への問題関心を明確にし、自己の社会福祉学および実践における問題関心を説明・記述することができるようになる。		
	プロジェクト研究Ⅱ	演習形式で行う。社会福祉実践への問題関心を整理し、自己の卒業論文・卒業研究のテーマや研究方法を説明、記述することができるようになることを目標とする。実習やインターンシップ等での学習成果を踏まえ、卒業論文・研究を視野に入れた各自の問題関心の整理を目指す。これまでの学習をさらに発展させ、問題関心に関連する先行研究を深めることで、最終年次に向け、それらを整理、表現するための研究方法のいくつかを学習する。そして、研究成果をまとめたレポートを作成する。		

授 業 科 目 の 概 要				
(社会共生学部社会福祉学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
第Ⅱ類科目	応用部門	プロジェクト研究Ⅲ	演習形式で行う。プロジェクト研究Ⅱで確定した研究テーマについて、個人またはグループでさらに探究し考察を深めることを目標とする。研究テーマに関する先行研究をふまえた上で、研究計画に従って実地調査・アンケート調査・インタビュー調査等に取り組み、分析する力を身につける。上記により、自分が取り組む研究テーマについて、その問題意識や目的を述べるができるようになる、研究計画を示すことができる、レジュメ等を用いて研究の中間報告をすることができることを目指す。	
		プロジェクト研究Ⅳ	演習形式で行う。プロジェクト研究Ⅲにおいて深めた研究テーマについてさらに考察を深め、プロジェクト研究として完成させることを目的とする。以下の3点を目標とする。 ①研究テーマに関するキーワードを説明することができる。 ②研究テーマの成果を社会で実践することができる。 ③研究テーマにアプローチするための研究方法を工夫することができる。 これまでのまとめとして、ディスカッションや講義等も交えながら展開し、グループ形式による学習成果の発表を行う。	
		インターンシップⅠ	演習形式で行う。区民ひろばにおけるインターンシップを通じて、「人間力を育む」ことを目標とする。以下の内容で行う。 ①働くことの意義について考える。 ②インターンシップを通して、世代間交流を体験し、コミュニケーション力を高める。 ③インターンシップを受けて、自らの職業適性、選択についての理解を深める。 ④インターンシップを通して、PDCAサイクルの枠組みを経験する。 インターンシップ授業では、教員による個別指導を適宜行い、インターンシップ先である区民ひろばの職員による指導、助言、クラスでの発表と意見交換を行う。	
		インターンシップⅡ	演習形式で行う。区民ひろばにおけるインターンシップを通じて、「人間力を育む」ことを目標とする。以下の内容で行う。 ①働くことの意義について考える。 ②インターンシップを通して、世代間交流を体験し、コミュニケーション力を高める。 ③インターンシップを受けて、自らの職業適性、選択についての理解を深める。 ④インターンシップを通して、PDCAサイクルの枠組みを経験する。 インターンシップ授業では、教員による個別指導を適宜行い、インターンシップ先である区民ひろばの職員による指導、助言、クラスでの発表と意見交換を行う。	
		卒業研究	プロジェクト研究Ⅰ～Ⅳの学習をふまえ、小グループ毎にプロジェクトのテーマと設定し、グループで役割分担し協力して進める。研究は、担当の教員の指導を受け、論文執筆規定をふまえた上で、問題意識が明確で論旨が一貫した報告書や作品等を作成し、グループ協働により成果発表する。グループ研究のため、グループメンバーとして自覚した行動がとれること、自分の分担範囲だけでなく、成果全体が理解できていることも重要である。さらに、研究報告の際は、レジュメやパワーポイントのわかりやすさ、グループと個人の熱意や応答的確かさ、及び全体の構成や考察も含めて、4年間の学修集大成として評価される。	
卒業論文	プロジェクト研究Ⅰ～Ⅳの学習をふまえ、小グループプロジェクトのテーマと設定し、グループで役割分担し協力して進める。研究は、担当の教員の指導を受け、論文執筆規定をふまえた上で、問題意識が明確で論理的な報告書や作品等を作成し、グループ協働により成果発表する。グループ研究のため、グループメンバーとして自覚した行動がとれること、自分の分担範囲だけでなく、成果全体が理解できていることも重要である。さらに、研究報告の際は、レジュメやパワーポイントのわかりやすさ、グループと個人の熱意や応答的確かさ、及び全体の構成や考察も含めて、4年間の学修集大成として評価される。			

(注)

- 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 私立の大学若しくは高等専門学校の出発点に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

## 学校法人大正大学 設置認可等に関する組織の移行表

### 平成31年度

入学 編入学 収容  
定員 定員 定員

### 令和2年度

入学 編入学 収容  
定員 定員 定員 変更の事由

大正大学		3年次	3年次	3年次
仏教学部	仏教学科	100	25	450
人間学部	社会福祉学科	80	-	320
	人間環境学科	55	-	220
	教育人間学科	60	3	246
心理社会学部	人間科学科	120	3	486
	臨床心理学科	110	5	450
文学部	人文学科	65	3	266
	日本文学科	70	-	280
	歴史学科	160	3	646
表現学部	表現文化学科	205	3	826
地域創生学部	地域創生学科	100	-	400
計		1125	45	4590
大正大学大学院				
仏教学研究科	仏教学専攻 (M)	30	-	60
	仏教学専攻 (D)	7	-	21
人間学研究科	社会福祉学専攻 (M)	5	-	10
	臨床心理学専攻 (M)	18	-	36
	人間科学専攻 (M)	3	-	6
	福祉・臨床心理学専攻 (D)	3	-	9
文学研究科	宗教学専攻 (M)	5	-	10
	宗教学専攻 (D)	2	-	6
	史学専攻 (M)	10	-	20
	史学専攻 (D)	2	-	6
	国文学専攻 (M)	3	-	6
	国文学専攻 (D)	2	-	6
	比較文化専攻 (M)	3	-	6
	比較文化専攻 (D)	2	-	6
計		95	-	208

大正大学		3年次	3年次	3年次	変更の事由
仏教学部	仏教学科	100	<u>33</u>	<u>466</u>	編入学定員変更 (8)
		<u>0</u>	-	<u>0</u>	令和2年4月学生募集停止
		<u>0</u>	-	<u>0</u>	令和2年4月学生募集停止
		<u>0</u>	-	<u>0</u>	令和2年4月学生募集停止
社会共生学部	公共政策学科	130	-	520	学部の設置 (届出)
	社会福祉学科	65	<u>2</u>	<u>264</u>	学部の設置 (届出)
心理社会学部	人間科学科	120	<u>2</u>	<u>484</u>	編入学定員変更 (△1)
	臨床心理学科	110	<u>2</u>	<u>444</u>	編入学定員変更 (△3)
文学部	人文学科	65	<u>2</u>	<u>264</u>	編入学定員変更 (△1)
	日本文学科	70	<u>2</u>	<u>284</u>	編入学定員変更 (2)
	歴史学科	160	<u>2</u>	<u>644</u>	編入学定員変更 (△1)
表現学部	表現文化学科	205	-	<u>820</u>	編入学定員変更 (△3)
地域創生学部	地域創生学科	100	-	400	
計		1125	45	4590	
大正大学大学院					
仏教学研究科	仏教学専攻 (M)	30	-	60	
	仏教学専攻 (D)	7	-	21	
人間学研究科	社会福祉学専攻 (M)	5	-	10	
	臨床心理学専攻 (M)	18	-	36	
	人間科学専攻 (M)	3	-	6	
	福祉・臨床心理学専攻 (D)	3	-	9	
文学研究科	宗教学専攻 (M)	5	-	10	
	宗教学専攻 (D)	2	-	6	
	史学専攻 (M)	10	-	20	
	史学専攻 (D)	2	-	6	
	国文学専攻 (M)	3	-	6	
	国文学専攻 (D)	2	-	6	
	比較文化専攻 (M)	3	-	6	
	比較文化専攻 (D)	2	-	6	
地域構想研究科	地域構想専攻 (M)	<u>15</u>	-	<u>30</u>	研究科の設置 (認可申請) (通信教育課程)
計		<u>110</u>	-	<u>238</u>	